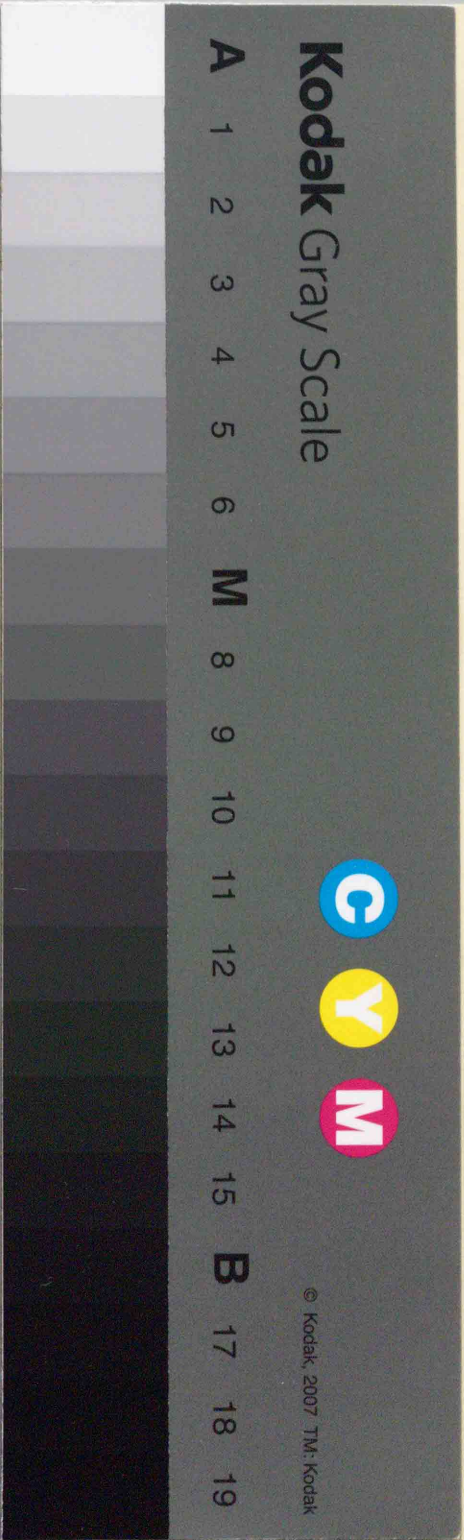
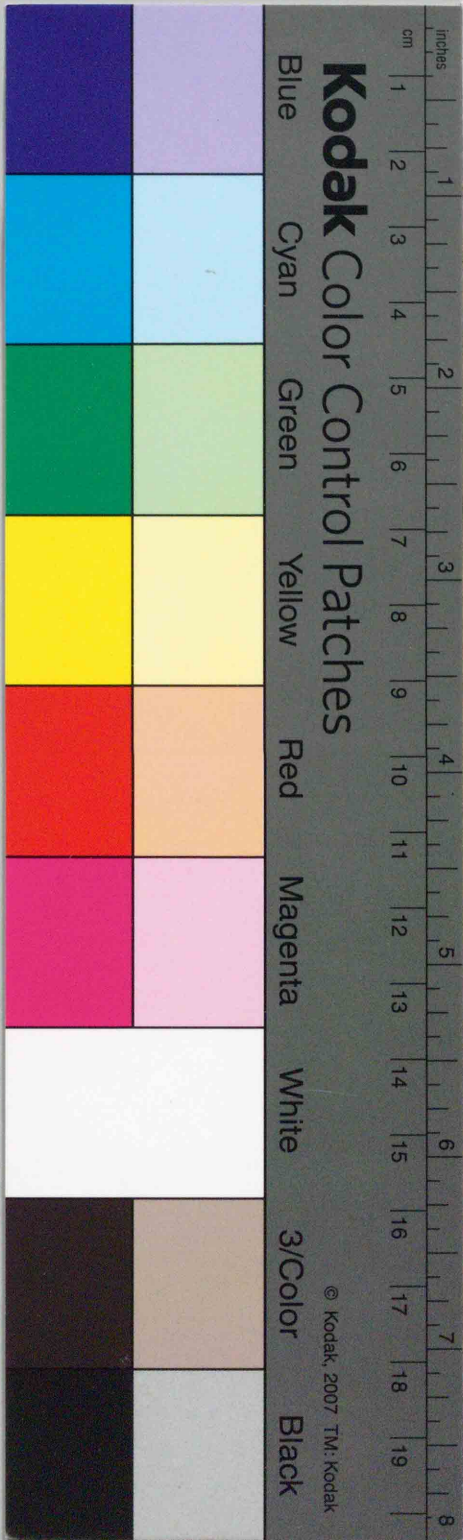
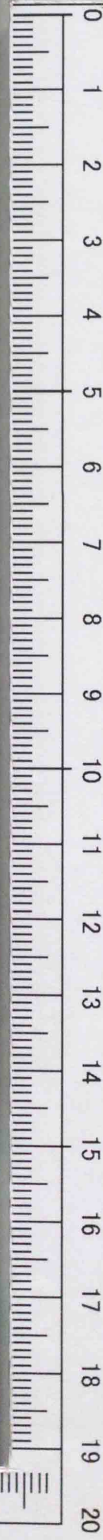
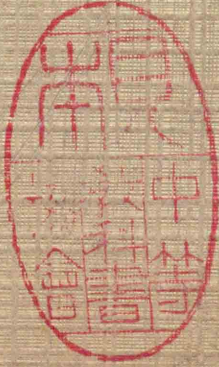


現代新文鈔

1

修正五版

東京
光風館藏版



41986

教科書文庫

4
810
41-1926
200030 2233



© Kodak, 2007 TM: Kodak

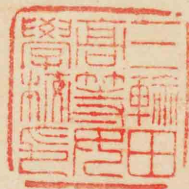


教科書文庫
4
810
41-1926
2000302233

日七月六年五十大
濟定檢省部文

編平彌田吉

現代文新選

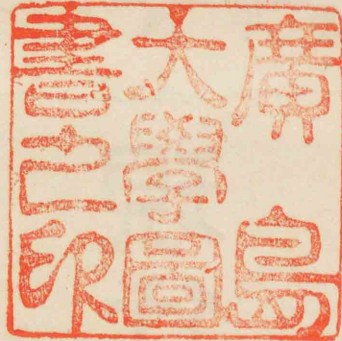


卷一

京東
版藏館風光

資料室

375.9
Y019



緒言

本書は中等学校の國語讀本に副へて清新な讀みものを供給する目的で編纂しました。

趣味の豊かなもの、表現の巧なもの、感激に満ちたもの、暗示に富めるもの、本書は務めてかういふ材料を選びました。

現代の文學は青年の心に共鳴し同感する點に於て極めて力強いものであると同時に、指導と啓發とを要することも甚だ切なるものがあるやうに思はれます。本書はこの點に於て出来るだけの用意を致したつもりです。

何と申しても、現代の文化を十分に受用するためには、現代文の生き生きしたものを讀まねばなりません。本書は常に増修補訂を怠らず、必

要に應じて版を改めるやうにして、始終時代の進歩から置き去られな
い注意を取るつもりでございます。
原文に對しては十分の敬意を表してをりながら、なほ多少の手を加へ
て體裁を整へねばならなかつたこともありませう。これは甚だ不本意
なことですが、本書の性質上まことに已むを得ないこととして諸家の
寛恕を請ふ次第です。

大正十四年十月

現代文新鈔 卷一

目次

一	お話二つ	薄田泣菫	一頁
二	カナリヤ	高濱虚子	六
三	童謡三つ		一五
四	勘ちゃん	二葉亭四迷	二〇
五	静雄の家	田山花袋	二三
六	蜘蛛の絲	芥川龍之介	四三
七	パナマの鰐狩		五一
八	明月の影を二つに割つて	五十嵐 力	六三
九	海邊の墓	西條 八十	六五

目次

一〇 難 船	相馬御風	六六
一一 金剛杖	江見水蔭	七〇
一二 猫	夏目漱石	七九
一三 搖籃の唄の思出	宇野浩二	八二
一四 元 朝	室生犀星	一〇五
一五 一月一日	島木赤彦	一〇九
一六 名工柿右衛門の村を訪ふ	吉田紘二郎	一一一
一七 花咲爺	武者小路實篤	一二五
一八 佐久良東雄		一五七



現代文新鈔 卷一

一 お話二つ

薄 田 泣 董

一 落錢を拾ふ樂み

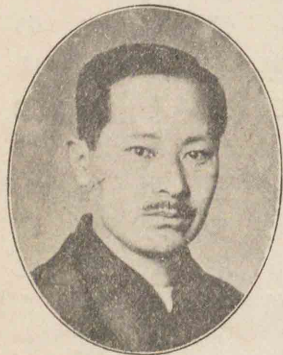
「世の中に何が嬉しいと言つたつて、途で落したお鳥目が自分の手に

還つた時の氣持ほどいゝものはございま

せん。お上人様は御存じていらつしやい

ますか。」

薄 田 泣 董



庵に棲んでゐた名高い禪僧である。

一 お話二つ

良寛 越後の歌僧
國上山 新潟縣西蒲原郡と三島郡との境にある山

薄田泣董 名は淳介 詩人 新聞記者 明治十五年 岡山縣連島町生

この話をした男だつて、世の中には、他にもつと嬉しいことがたんとあるのは知つてゐたらしいが、行ひ澄した良寛には、そんな話も出来なかつたものだから、精々落したお鳥目位で、済ますことにした。

良寛はそれを聞くと、不思議さうな顔をした。そして汚れた巾着から散錢ちりせんを二つ三つ取出して、わざと道の上に落した。お鳥目はかちんと音を立て、上人の脚もとで二三度くるくると舞つた。

良寛は手を伸して、其の散錢を拾つたが、格別變つた氣持もしなかつた。「一向嬉しくない。どうしたもんだらう。」

上人はとぼけた顔をしてじつと考へ込んだ。

「もつとたんと落さなくちやならないのか知ら。」

先刻から上人の素振を見て、馬のやうににや／＼笑つてゐた男は、一寸小腰をかゞめた。

「お上人様、今一度やつてみて下さい。さうしたらきつとおわかりになるだらうと思ひます。」

良寛は巾着に入れかけてゐた散錢を取出して、また途の上に落した。散錢はお上人に當てつけたやうに、其の邊をころ／＼轉げ廻つてゐたが、いつの間にか草のなかに滑り込んで、そのまゝ姿を隠してしまつた。良寛は手を伸して、そこらを探し廻つたが、お鳥目は一向顔を見せなかつた。お上人はうるたへ出した。禿げた頭を唐茄子トマトのやうに眞赤にして草の中を搔分けてゐたが、暫くしてやつとこさで見つけ出した。お上人は汗ばんだ顔を持ち上げた。

「なる程嬉しかつたよ。ほんとに嬉しいもんだな、落した錢を拾ふといふものは。」

トマト
蕃茄
あいなす

二 焼肴は右か左か

中島棕隱

京都の漢學者詩文に長ず。飄逸無頼着な人。安政三年(二五二六)歿年七十七

頼山陽

京都の漢學者生れは安藝竹原父は頼春永特に詩文書が得意日本外史の著者天保三年(二四九二)歿年五十三

姑蘇城外

月落烏啼霜滿天江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到客船。(唐詩選張繼)

楓橋 夜泊 西十と

中島棕隱といふ儒者はなか／＼の洒落者であつた。ある時知り合ひの家へ訪ねて行くと、ちやうど頼山陽もそこへ來合せてゐて、時分どきだといふので、晝飯の馳走にあづからうとしてゐるところだつた。剽輕で無遠慮で通つた棕隱は平氣で座に上つて行つた。折角の客なので、主人は棕隱にもお膳を出した。棕隱はじろりと横目で自分の膳と山陽のを見比べてゐたが、つい大變な事を見つけ出した。それは焼肴が山陽の方は大きくて、自分の小さいといふことである。

「いかん／＼。幾ら後客にしても、魚の小さいのを見るのは餘り氣持がいゝものでないて。」

棕隱は腹の中でかう思ひながら、何食はぬ顔で盃を手にとつた。

暫くすると棕隱はいつに似ず眞面目な調子で山陽に話し出した。

「君、つかん事をきくやうだが、姑蘇城外の蘇の字だが、あれは艸冠の下

ヤカ

の魚と禾とはどつちに書いた方がほんたうだつたかな。」

「蘇の字かい、あれは魚が右にあらうと、左にあらうと同じだよ。」

山陽は事によつたら魚の字など逆とんぼになつてゐたつて、構はないやうな調子で答へた。

「さうかなあ。」

棕隱は疊の上に指先でわざ／＼字を書いて見た。

「魚は右にあつても、左にあつても構はないんだつたかな。」

「さうさ。何だつてまたそんな事をきくんだい。」

「實は斯うしたいからなんだ。」

棕隱は箸でもつて矢庭に山陽の焼肴と自分のと取換へた。

「ね、魚は右にあつたつて、左にあつたつて一向差支ないんだらう。」

「これはしくじつた。ははは。」

山陽は聲を立て、笑つた。

吾が愛する頼山陽と世上の物識とに教へる。魚は右にあらうが、左にあらうが、早く箸を下した方が、一番いゝのである。(茶話)

高濱虚子

名は清
俳人
小説家
明治七年愛
媛縣松山市
生

二 カナリヤ

或春の夕暮のことであつた。

鎌倉の西御門の水野家の菩提寺である

高松寺に滞在中であつた。蘆田柳窓君は今一



高濱虚子

供も皆一齊に其の菓子袋に眼をあつめた。菓子が入つたものであつた。私も妻も大勢の子

其の時柳窓君が坊つちやん、好いものをあげ

に入つたものであつた。私も妻も大勢の子

として如何にも軽さうで、而も其の膨れ具合が變挺子で、柳窓君は其の口の所をしかと握つてゐた。聽てそれが一匹のカナリヤであるとかかつた時に、蠅除けの丸い金網を盆の上に乗せたのが持出されて、そのカナリヤは窮屈さうに其の中に入れられた。電氣の光で見るとカナリヤは殆ど黄色が無くつて、たゞ純白な鳥に見えた。人を怖れて飛ぼうとしても金網の圓屋根が上からかぶさり懸つてゐるので、翼を延ばすことも出来ず、脚を屈めたまゝ、で小さい眼を異様に輝してゐた。柳窓君は斯う話した。

「西御門の家を出て少し來ると、道端に小さい鳥で十分に飛ぶことも出来ないでゐるのが見えた。近寄つて見ると此のカナリヤであつた。私は容易くそれを掴まへることが出来た。どこかの籠を抜け出たものであらうが、此のまゝ、放つて置いては却て他のものに殺される虞があるのか、はいさうに思つたから袂に入れたまゝ、で八幡前まで來て、

或店で菓子袋を貰つて、それに入れて來たのです。」

此の異様な贈物は一方ならず私の家の者を喜ばせた。が中で最も驚喜したのは今年十一になる次男の友次郎であつた。早速一つの鳥籠を近所から借りて來てカナリヤを其の中に移した。前の金網よりは稍、自由になつたので、却てカナリヤは人を怖れて其の中で騒いだ。早速稗の鉢も水鉢も其の中に入れられて、柱の高い釘のところヒコに掛けられた。友次郎は柱の下に立つて、暫くそれを、見守つてゐた。

その翌朝友次郎の起きたのはいつもより早かつた。彼は其のカナリヤに行水させることゝ、其の翼を掃除することゝ、を自分から自分の役目と考へたものらしかつた。私等のまだ寝てゐるうちに、彼は床を離れてカナリヤの籠を持つて湯殿に這入つて暫くの間そこで時間を費した。それから彼は顔を洗つて飯を食つて時間に遅れぬやうに學校へ行つた。

カナリヤは人馴れてよく啼いた。午前は大方の子供が學校へ行くので、靜かに一人縫物をしてゐる姉の眞砂子の頭上で、カナリヤは何の屈托もなくほがらかに歌を歌つてゐた。午後になつてどや／＼と多くの子供が學校から歸つて來ると、大方みな其の籠のもとに立つてこれを見上げた。中にも友次郎は、一人自分の力に生育さすべき此の小さい愛すべきものを熱心に眺めた。さうして翌朝又何時もの通り早く起き出でて長い時間を湯殿に費した。

湯殿の流しの隅に小さい青いものが煙の如く生えてゐるのを、或日私は湯に這入りながら見つけて不思議なことに思つた。優曇華が咲くといふことをよくいふが、これも其の類の徴で、もあらうかと思つた。がよく近づいてそれを吟味した時に、それが稗の芽であることを明にした。友次郎が毎朝鳥籠を掃除する時に、そこにこぼれた稗が板の隅にありながら、濕氣を得て芽を出したものであると氣がつくと、何とな

三ヶ年ニカキ
小笠原王さま
松山
梅

ニカナリヤ

ヨリ
ア
ラ
ハ
ル

く微笑された。元來土に生えたものでなく板間の上に流し湯の濕氣と暖氣とを得て煙のやうに發芽した其の稗は、翌日見るともう湯に流されてしまつて、あとをもとづめなかつたが、二三日して又別の稗が同じやうに夢の如き青いものを出して居た。しかしそれが流されておとれたもなく、なつて仕舞ふこともまたもとの通りであつた。

「何時まで續いてあらう。」と家人が皆、其の友次郎の骨折を危んでゐたが、併し彼の早起は少しも變らなかつた。カナリヤは何時も好い羽色をして愉快に歌ひ囀つてゐるのを私は毎朝軒下に見出した。

「二羽ではかはいさうだから、一羽買ひ足して、籠も本當のカナリヤの籠にしてやらう。」などといふ動議が今は大人から出るやうになつた。今迄の籠はカナリヤの籠ではなく、普通の鳥籠であつた。お友達の鳥は容易に買はれなかつたが、本統のカナリヤの籠は間もなく或人の周旋で立派過ぎるほど大きなのが近所から借りられた。一番喜んだのは

友次郎であつた。カナリヤは早速其の手によつて其の籠の方に移された。新らしいカナリヤの籠は玄關の下駄箱の上に置かれた。カナリヤは新らしい廣い天地に自由に飛びかつ歌つてゐた。友次郎の手が籠の中に這入るのを見ても小鳥は最早驚いて羽搏つやうなことはなかつた。

それから數日経ての事であつた。或日私は机に凭れてゐると、もう學校から歸つてゐる友次郎と妹の宵子の聲が玄關の所に當つて斷續して聞えてゐたが、やがて宵子の聲で、「カナリヤが逃げた逃げた。」といふのが聞えた。それは極めて暢氣な緩かな調子であつたので、私は餘り氣には止めなかつた。家人等もそれに氣をとめるものが無かつた。それに友次郎は静まり返つてゐて何とも言はないので、全く宵子が戯談半分にからかつてゐるものと一同が受取つたのであつた。暫くしてから又同じやうな落付いた緩かな調子で宵子は繰返して言つた。

「カナリヤが逃げた逃げた。」
暫くしてから、

「本當に逃げたのですか、お坊つちやん。」といふ貞さんの聲がきこえた。
「まあ本當に逃げたの？」といふ眞砂子の聲も聞えた。けれども友次郎の聲は依然として少しも聞えなかつた。さうして、え、本當に逃げたのよ。」といふ宵子の落着いた聲が聞えた。私は机の上の仕事を休めて暫く聞き耳を立て、ゐたが、多くのものゝ斷續して發する聲で、カナリヤはだん／＼と下の枝から上の枝へ、近い木から遠い木へといふ風に枝移りして行つて、呼んでも騒いでももう捕へることの出來ぬ所へ行つてしまつたらしく想像された。「カナリヤが逃げた逃げた。」といふ宵子の悠長な聲はまだ時々繰返されてゐたが、友次郎の聲は少しも聞えなかつた。「お坊つちやん、あなたどうしてお逃しなすつたの？」などといふ貞さんの詰問の聲も聞えたが、それに答へる友次郎の聲は聞えなかつた。

私は再び机の上の仕事に取掛つたが、暫くして家人から斯ういふことを聞いた。「あのカナリヤはたうとうお隣の庭に飛んで行つてしまつたので、御用聞きに來た八百屋の小僧や、牛肉屋の小僧までが大騒ぎをして、今までの籠を持つて行つたり、網を持つて行つたり、竿を持つて行つたりして騒いだけれども、だん／＼木深く逃げて行つてしまつても捕へることは出來ぬ。」とさういふ話であつた、家人が皆落膽したやうな顔をしてゐた。併しそこに友次郎の姿は見えなかつた。その日暮方であつた。

「どうもあのカナリヤは裏の木で啼いてゐるやうだ。」といふやうな話を貞さんがした時、家族のものゝ頭には、又彼のカナリヤの事が一樣に浮んだ。其の時妻は私に斯う言つた。

「どうしてあのカナリヤが逃げたのかと思つたら、友次郎はカナリヤを

どうかしてやる積りて、前の小さい籠の方に移さうと思つて、大きな籠の戸を一杯に明けたものと見えるのです。それで何故そんな不注意なことをしたのかと思つて聞いてみたら、もうあれ程自分に馴れてゐるものだから、カナリヤは逃げないものだと思つてゐたらしいのです。さう言つて妻は笑つた。私も笑つた。

その後私の會つた友次郎は、眼に涙をためてゐたが、カナリヤに就いては一言も發しなかつた。彼に對しての忘恩のカナリヤは、矢張り我が家と隣の家との間の裏の木立に啼いてゐるらしいと貞さん等は言ひ合つてゐたが、彼はそれに就いても何とも言はなかつた。その裏の木立のカナリヤらしい聲も翌朝は聞えなくなつてゐた。カナリヤの籠はそれ／＼近所のうちへ返された。(朝の庭)

三 童謡三つ

明日

西條八十

西條八十
詩人
明治二十五年
東京生

おもては雨よ、しと／＼雨よ、

小枝のうへに

子雀一羽

冷く濡れて。

西條八十



お室の中は、病氣の子ども、

ベッドのうへに

さみしくねむる、

うと／＼ねむる。

ベッド
Bed

三童謡三つ

雀は啼くよ、

「日暮がくるに、小羽根が濡れる」

子どもは泣くよ、夢からさめて

「お喉がいたい。」

明日になれば、天気も晴れよ、

明日になれば、小羽根もかわこ、

明日になれば、お風邪もなほろ、

明日になれば、明日になれば——

神の田圃

神の田圃の白檜の枝に
白い雀が来てとまる。

藤森秀夫

七七 七五 七七 七七 七五

藤森秀夫

獨逸文學者

明治二十七

年長野縣池

田町生

神の田圃

信州の仙境

眞白雀よ

何處から來たの、

萬年嶽の萬年雪で

萬年 羽根を染めて來た。

可めナミヤ律

神の田圃の白檜の枝に

白のお猿が尻尾をかけた。

眞白お猿よ

何處から來たの、

萬年嶽の萬年雪で

萬年 尻尾を染めて來た。

神の田圃の白檜の枝に
白い天女が来て坐る。
眞白天女よ

何處から來たの、

萬年嶽の萬年雪で

萬年 着物を染めて來た。

濱田廣介

本名廣助

詩人

明治二十六年
山形縣生

兔の耳

うさぎのお耳は

よいお耳、

よいよいお耳で

何をきく、

芒の穂の波

濱田廣介

廣助

風の波、

三日月さまの

ゆれる音。

みそ萩小萩の

ひらく音、

ころ／＼ふくらむ

露の音、

とほくの砧も

きこえます。

もぐらの寢息も

きこえます。

(日本童謡集)

二葉亭四迷
長谷川辰之助

文學者
江戸生
明治四十二年歿
年四十六

四 勘ちやん

ゆき雪のふり
ゆげにかりの外すけ
内膳ありの外すけ

二葉亭 四迷

「内ん中の鮑つ貝、外へ出りや蜆つ貝。」と友達に囃されて、私は悔しがつ

て能く泣いたつけが、併し全く其の通りであ

つた。



二葉亭四迷

どういふものだから、内ではお祖母さんが舐めるやうにしてかはいがつてくれるが、一向嬉しくない、却てうるさくなつて、出るなと留め

る袖の下を潜つて外へ駈出す。

しかし一步門外へ出れば、もう浮世の荒い風が吹く。子供の時分のそ

れは何處にもある苛めつ兒といふ奴だ。私の近處にもそれが居た。

勘ちやんと云つて、私より二つ三つ年上で、獅子つ鼻の、色の眞黒な兒だ

つたが、かういふのに限つて亂暴だ。親仁は郵便局の配達か何かで、大

酒呑で、阿母はお引摺と來てゐるから、いつも縫裂きだらけの着物を着

て、踵の切れた冷飯草履を突掛け、片手に貧乏徳利を提げ、子供の癖に尾

籠な流行歌を大聲に歌ひながら、飛んだり跳ねたり曲駈といふのをや

りやり使に行く。始終使にばかり行つても居なかつたらうが、私は勘

ちやんの事を憶ひ出すと、なぜだかいつも其の使に行く姿を目に浮べ

る。

勘ちやんは、家では何も貰へぬから、人が何か持つてさへゐれば、屹度欲

しがつて、率直に「おくんな。」と云ふ。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭を振

ると、顛を突きだして、「いゝよ。」と云ふ。薄氣味悪くなつて「遣らう。」と

するが、もう受取らない。「いゝよ。くれない」と云つたね。いゝよ。」とそ

ればかりを反覆して行つて了ふ。何となく氣になるが、子供の事だ、遊

にほうけて忘れてゐると、何時の間にか勘ちやんが使の歸に、何處かで

蛇の死んだのを拾つて來て、そつと後から忍び寄つて、いきなりびしや

ずほんの鳥の鳴く時に、

むかし、お城の姫様が

沼の大蛇に見こまれて……
沼の蛇、お城の姫様を喰ひ殺してしまふ

かういふ唄を誰か歌つて居たのを、静雄は覚えてゐます。

「あれはね、小さな鳥だとき。それが嘴を沼の水の中に入れて、そして鳴くもんだから、それであんなに大きく聞えるんだとき。何も怖いことはないんだよ。」

かう言つて母親は静雄に聞かせるのが常でした。

静雄はかなり大きくなる頃まで、其のずほんの鳥の事をいろ／＼に考へました。「それ、ずほんの鳥が鳴く。」かう言はれると、大抵は悪戯は止めて、よく母親の言ふことを聞きました。静雄は其の時はもう親子一人の淋しい境涯でした。父親は遠い國に往つて、遠い／＼處で國の爲に勇ましい戦死をして居ました。

「お前一人きりだからね、丈夫でゐておくれよ。ね、お願いだから。」

母親はかう言つて静雄を強く抱きしめました。

垣根の傍だの、畠の道だの、小さなお宮だの、さういふ處で静雄はよく遊びました。吳蓆を敷いたり、玩具を持つて行つたりして。

併し静雄の頭には矢張沼が一番はつきりと映つて居ました。きらきらする沼、赤い夕日を帯びた沼、暗い淋しい沼、夕立の黒い雲の半分蔽ひかゝつた凄じい沼、西風の立つた朝のくつきりと藍のやうに青かつた沼――。それが何時も一つ／＼はつきりと頭に浮んで來ました。

沼のほとりに湯屋があつて、其處へよく母親に連れられて行つたことを静雄は覚えて居ました。静雄は其の頃もう七歳か八歳位になつてゐました。そこには額の處に大きな瘤のあるお婆さんがゐて、それがまた優しいお婆さんで、母親と色々話をするのを、静雄は傍でよく聞いて居ました。其のお婆さんは蜜柑だのお菓子だのをくれました。

ある夜のこととした。静雄は湯屋の戸を明けて外に出ました。ふと見ると沼が金のやうに美しくきら／＼と光つて居ます。静雄は子供ながら何とも言はれないやうな心持で、母親が内から出て来る間、じつとそれを見て居ました。

「お、綺麗なお月様。」

其處から出た母親も、思はず知らずかう言ひました。

沼が一ところ光つて金を碎いたやうにちら／＼して居ました。船着の處に繋いである舟も、はつきりと見え（汎ノ玉）ました。空には大きな月が…。

「綺麗だらう、沼が——」

かう母親が指して見せました。静雄は（物怖し）黙つて唯見て居ました。

沼に近い丘の上には、綺麗な雲の見えることが多う御座いました。静雄は毎晩縁側の隅の柱に凭りかゝつたり、垣の外に出たりして、その

夕方の雲を見るのが好きでした。何といふ美しい綺麗な空だつたてせう。赤い／＼空に錦の縁を縫つたやうな雲が見えたり、魚の鱗のやうな細かい赤い雲が見えたりしました。赤い、まるで血の様な色彩が見るが中に、薄く／＼なつて行くかと思ふと、落日の光がぱつと黒い雲にさして後光のやうな金色の光を放つことなどもありました。

「夕焼け小焼け、明日天氣になあれ。」（ソメイメイの花）

其の時分はさういふ子供達の聲が彼方此方に聞えてゐました。静雄もその群と交つてさう言つて遊んでゐることも御座いました。しかし静雄は一人で立つてその夕方の雲を見てゐる方が好きでした。見てゐますと、赤く染つた雲は段々薄く／＼なつて、しまひには家だの樹だの沼だのがその夕焼けの中に黒く見えて、そして段々暗くなつて行つて了ひます。夕焼けにかゝやいてゐた沼も段々暗くなつて行つてしまふのでした。

「母さん、どうしてあんなに綺麗な雲が出るんでせう。」
静雄はかう度々母親に尋ねました。

「ほら、母さん御覽なさい、あんな雲が出ましたから。」

かう言つて、母親をわざ／＼呼んで來ることなども御座いました。其の頃静雄の幼い心を惹いたのは、夕方の綺麗な雲ばかりではありませんでした。ざあつと降つて來る雨、終夜がた／＼と雨戸を鳴らす風、さら／＼光る星、細くなつたり丸くなつたりする月——何れ静雄の好奇心を誘はぬものはありませんでした。

「母さん、どうしてあんな風が吹いて來るんでせう。」

「母さん、どうしてお月さまはあんなに細くなつたり、丸くなつたりするんでせう。」

「母さん、どうしてあんなにきら／＼する星があるんでせう。」

學校の先生がある時星の話をしてくれました。星にはいろ／＼の種

類があつて、地球や月などと同じ物で、遠いからあんなに小さく見えるが、そばに行くと矢張非常に大きいものだなどと話してくれました。静雄はそれから星を見ている／＼なことを考へるやうになりました。夜母親と寝てゐますと、夜風ががさ／＼と裏の草藪を渡つて來ました。

風吹け、な吹け、

明日は風をあげてやる。

風吹け、な吹け、

明日はさるをあげてやる。

風吹け、な吹け、

坊やが静かに寝てる間に、

坊やがあした起きるまで、

がさ／＼と萱や篠の動く音は、どんなに静雄の心を動かしたか知れませんでした。暗い夜の中を、狐か狸より他に通つて行くものもない闇

の夜の中に、静かにかさこそと音を立て、通つて行く風の音。「あの風は何處から来て何處へ行くんだらう。風の泊つて行く家はあるんだらうか。こんな夜中にさびしくはないだらうか。」こんなことを考へて、静雄はひとり大きな眼を明いてゐることがありました。

「風は風の神つて言ふのがあつて、風穴から出て来て、風の袋をひろげるので、それであんなに風が吹く。」

どうかすると、母親は静雄にこんなことを言つて聞かせることが御座いました。それに其の頃見た繪の本にも風の神が風の袋をひろげてゐるところが書いてあるのを見たことがありました。

「本當か知ら。母さんの言つた事は本當か知ら。」

樹や草を動かす風を見て、静雄はじつと立つて考へてゐることなどもありました。

チ
ク
ス

正月——雪の中の正月それがどんなに静雄には楽しかつたでせう。親一人子一人のさびしい生活でしたけれど、それでも田舎ですから歳の暮には彼方此方の知つてゐる人が手傳ひに来て、澤山餅をつきました。そして其の時には母親の姪に當る人だの従弟になる人だのが、その前の夜から来て泊つて行きました。

餅搗の朝はまだ暗い中から、人々が起きて働きました。昨日磨いで置いた四斗桶の中の餅米の上水は氷つてゐました。静雄が提燈のあかりを翳して見せてゐると、母親は片口を持つて来て、「お、つめたい。」と言ひながら、その氷を砕いて、そして眞白な餅米を蒸籠の中に移しました。ざく／＼といふ冴えた音と眞白なつめたさうな餅米と、それがどんなにはつきりと静雄の頭に印象されて残つてゐたでせう。静雄は今でもその朝のことを思ひ出しました。

竈の下に燃えてゐる赤い火、三つも四つも重ねた蒸籠の上から白く

る湯氣、もう好い、ふけた。」加減を見た母親がかう言つてそれを持つて白の中にあけると、待構へてゐた従弟は杵を取つて先づ最初にそれを捏ねはじめ、……姪も待構へてゐておろす杵の調子をはかつて手がへしをする、……杵の音はまだ夜の明けない中から勢よく四邊に聞えるのが常でした。

隣で餅搗、

お椀持つて駈出せ、

隣で餅搗、

箸を持つて駈出せ。

こんな唄がありました。家の内は笑ひさゞめく聲で充たされました。

「夜が明けない中に三白搗いた。」

母親が得意さうにかう言ふのを、靜雄はよく聞くことがありました。

母親はお供へ餅を拵へるのが上手でした。板の上に搗立ての餅を従

弟が運んで来る。それに粉をふりかけて、せつせとそれを手で圓めました。お供へ餅の腰が高く出来ると、其の年は運が好いと言ふやうなことがありましたので、母親はいつも一生懸命にそれを丸めました。

「矢張母さんは氣丈者だけあつて、お供へ餅は上手だ、男の拵へたやう

なお供へ餅がいつでも出来る。」

従弟は笑ひながら何時もこんなことを言ひました。

井戸の神と竈の神と鎮守と厠と、其の他神棚に上げる小さいお供へ餅が其處らに幾組ともなく出来て、のし餅が三枚も四枚も出来上る頃には、もうお雑煮だのお汁粉だのが出来てゐました。

霜を帯びた青い柔かい菜の雑煮餅、従弟が沼で打つて毎年のやうに持つて来てくれる鳴の雑煮餅、それを靜雄は大きくなるまで忘れることが出来ませんでした。

鳴と言へば従弟は上手な銃獵者でした。父親の使ひ古した旋條銃を

ある日母親から貰つて行つて、喜んで鳴や雁や小鳥などを打ちました。ある年大きな雁を一羽持つて来てくれたことを静雄は覚えてゐます。紫の嘴をして茶色の羽をひろげた大きな雁。

「丁度これが立つていくところを蘆ん中にかくれて覗つてゐたんです。どんと放すと、好い鹽梅に當つて、すぐ五六間先のところに落ちた。しめたと思つたが、運悪くそこが蘆の根の薄いところで、ずぶずぶ足が這入る、まご／＼すると體まで這入つてしまひさうなので、それは困りましたよ。仕方がないから、蘆を五本も六本も集めて倒して、その上を渡つて漸く拾つて來ました。随分大きいでせう、一貫五百目位はある。」

さも得意さうに従弟は言つて、

「そら静さん、此處が彈丸の當つたところだ。」

かう言つて羽の下のところを静雄にひろげて見せました。

静雄がこの母親の従弟に連れられて、銃獵に行つたのは、もう餘程大きくなつてからですが、兎に角其の頃にはいろ／＼な水鳥が沼に下りて來たものでした。夕方になると、雁が列をつくつて赤い夕焼けの中を低く鳴きながら、沼に下りていくのを、よく見かけました。

静雄は九歳位の時、この従弟に連れられて一度一緒に往つたことを覚えてゐます。

「そこに静ちゃん待つてお出。」

静雄のさう言はれたのは、茶畠のやうなところでした。夕焼けがもう微かになつて、日はとつぷりと暮れようとする頃でした。従弟は茶畠を其處から三うねばかり隔つたところに身をかがませて銃先を上にあげて待つてゐます。其の時も矢張雁だつたと静雄は覺えてゐます。ふと夕焼けの暗くなりかけた空に、ける／＼といふ聲が聞えて、大きな鳥の羽が映つたと思ふと、すぐずどんといふ音がして、大きな鳥の落ち

るけはひがしました。

「ほら御覽、こんな大きな……。」

從弟は得意さうに見せました。

丘の上の正月は靜かな、何方かと言へばさびしい正月でした。門松も大きなのを建てるやうな家はありませんでした。どの家もくゝ小さな枝松を入口に釘で打ちつけて、それに輪注連をかけるばかりでした。それでも國旗はところくゝに翻つて、それが晴れた冬の空にくつきりと見えてゐました。

その頃はもう大抵雪が降つて、地上は深い泥濘でした。それでも晴衣を着た娘達は羽子板などを持つて歩いていきました。晴れた日が續きました。

靜雄が近所の家に歌留多に呼ばれて行くやうになつたのは、それは餘

程大きくなつてからのこと、幼い頃は、大抵雙六などを出して、近所の子供をつれて來て、炬燵のそばで遊びました。母親は蜜柑だの菓子だの餅だのをくれました。

靜雄はその時分の雙六の繪をよく覚えてゐます。一枚の雙六は御殿女中の生活を畫いたものでした。飛び雙六で、殿様若様お姫様大老中老おつぎなどとわけてありました。そして其の人達の日常の言葉がその上にかいてありました。それを母親は讀んできかせて、いろく御殿の中のことなどを話してくれました。これは餘程昔から家にあつたらしい古い雙六で、裏打が丁寧にしてありました。一枚は廻り雙六で、これは東海道の五十三次が繪になつてゐました。彌次郎兵衛喜多八の可笑しい滑稽談が一つくゝ繪になつて居ります。靜雄は子供心に、大人の癖にどうしてそんなことをしたのかと不思議に思ひました。そのころはそれを本當にあつたこと、ばかり思つてゐました。

彌次郎兵衛
喜多八
十返舎一九
の著した東
海道膝栗毛
の中の人物

上りは京都で、喜多八が長い梯子を擔いでゐるところが畫いてありました。彌次郎兵衛が、百姓のかついだ肥料桶を、鼻を掴みながら棒でかき廻してゐると、後で、喜多八がそれを指して鼻を掴んでゐるところなど殊に靜雄には可笑しく思はれました。その雙六は泊りの處が休になつてゐて、其處に往くと一回待つてゐなければなりませんでした。それからもう一枚ありました。それは明治のはじめになつてから、出來たものらしく、金時が鉞を持つて熊の子と遊んでゐる繪があつたり、^{マサカリ}太田道灌に少女が山吹の花を捧げてゐる繪があつたりしました。さ^{ツル}かと思ふと、横濱の西洋人が長い烟管で煙草を吸つてゐるところな^{ツル}どがありました。それから夕顔棚の夕涼だの、頼光の大江山鬼退治な^{ツル}どがありました。この雙六は、上りが多いので、勝負がすぐつきました。靜雄は炬燵に當りながら、母親からその雙六の繪の話をよく聞きました。

十五六日以後は餅に黴が生えて、黄色なところと青い處が出て來ました。具足開きの日に、

「今年のやうに、お供へ餅の固いことはない。早でなければ好いが。」
こんなことを言ひながら、縁側の日當りのよい處に、お供へ餅を持出して、弓の弦で、母親がこはしてゐることなどがありました。

丘の上の家々は、點々としてゐました。其處に一軒、彼處に一軒、それも樹や林や竹藪などで劃られてゐる家が多う御座いました。昔の城のあとであつただけに、處々に土手が出來てゐて、その下の濠には、草が一杯に茂つてゐました。

靜雄の家の裏にも、その小さい土手がありました。その土手の上には、栗だの櫛だのが茂つて、草や荊棘が一杯にはびこつて、夏はそれを押分けることも出來ないのですが、冬になると、その土手の下の濠で、氷江をするために、おのづと、其處に一條の路がつくのでした。靜雄も友達と

一 緒によく其處に下りて行きました。
氷沓の出来るところは、さう大して廣い場所でもありませんでした。
それに草や澤瀉の葉などの凍りついてゐない滑かなところを擇ばなければなりません。それでも、長さ三間、幅一間位の滑らかなところは到る處にありました。日曜日の午前には、其處に多勢の子供等が集つて來ました。

一 二月の頃になると、氷は固く厚く張詰めて午後になつても、こはれるやうなおそれがなくなつて行きます。駒下駄では、どうも旨く沓らないなどと言つて、眞竹の太いのを二つに割つて鼻緒を上げて、それで氷沓の下駄をつくりました。

静雄の家の裏の土手の上からは、沼に面してゐない方の廣い野が一面に遠く見渡されました。

丘の上の士族屋敷は、一方城址に沿ひ、一方沼に沿ひ、一方町に通じ、一方野に連るといふやうな地形になつてゐました。静雄はよく土手の上に立つて、遠い野の末に連る山々の雪を見る子でした。

遠い山々の雪。それはどんなに美しく朝日夕日に輝いたでせう。廣い野のはてに聳えて遠くく連つた山脈は、幼い心を誘ふに十分な力を持つてゐました。

幾條にも深く刻まれた山の巒、それに日が斜にさして、雪がきら／＼と眩いほど美しく光りました。

「綺麗だねえ、母さん。」

かう静雄が言ひますと、

「お前は大きくさへなれば、あの山にでも何にでも登れるんだよ。あの山の澤山ある中で、一番高い山があるだらう。それ、その眞中にある——あれが日光といふ山ですよ。父さんなぞ、其處に在番で行つて、一年も二年もいらしたことがあるんだよ。それは立派なお宮

目か
ク
ク
ク
ク

があつたり、大きな瀧があつたりするんだよ。家に箏笛があるだらう。そら、お前の着物や何かの這入つてゐる、あれが日光から、其の時、父さんが持つて来て下すつた箏笛なんだよ。」

母親は眩く光る山の雪を見ながら、
「お前も大きくなつたら行つて御覽、男だからお前は、何處へても行けるよ。勉強さへすれば、西洋へでも……。女は駄目だけれどねえ。」

：女はさういふ勝手なことは出来ないけれどねえ。
かう言つてもう一度、その遠く光る山を見ました。

朝に夕に變つて行く山々の色彩、静雄は唯それに眼も心も奪はれて了ひました。(小さな鳩)

芥川龍之介
文學者
明治二十五年
東京生

六 蜘蛛の絲

芥川龍之介

或日のこととてございませす、お釋迦様は極樂の蓮池のふちを、一人でぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。



芥川龍之介
池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の藥からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございませす。
やがてお釋迦様は其の池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。
此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、水晶のや

六 蜘蛛の絲

うな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗き眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。

すると、其の地獄の底に犍陀多ケンダタと云ふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿が、お眼に止りました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ、善い事をした覚えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますとちひさな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は、早速足を舉げて踏殺さうとしましたが、いや／＼、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無闇にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ。」と、斯う急に思ひ返して、たうとう其の蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、此の犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るなら、此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居りました。

お釋迦様は、其の蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の庭へ眞直にお下しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた犍陀多でございます。

何しろどちらを見ても眞暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮き上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るの

でございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて居て、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。

これは、此處へ落ちて來る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れ果て、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。

ですから、流石大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、たゞもがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を舉げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中に遠い／＼天の上から、金色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながらする／＼と自分の上へ垂れて參るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、思はず手を打つて喜びました。此の絲に縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ござ

いませぬ。

いや、うまく行くと極樂へは、ひる事さへも出來ませう。さうすれば、針の山へ追ひ上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

かう思ひましたから、犍陀多は早速其の蜘蛛の絲を兩手でしつかりと掴みながら、一生懸命に上へ／＼と、たぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことですから、斯ういふ事には、昔から慣れ切つて居るのでございます。

併し地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦燥つて見た所で容易に上へは出られません。やゝしばらくのぼる中に、到頭犍陀多もくたびれて、もう一手繰りも上の方へは手繰れなくなつて仕舞ひました。そこで仕方がございませんから、先づ一休み休む積りで、絲の中途にぶら下りながら遙かに目の下を見おろしまし

た。

すると、一生懸命にのぼつて来た甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隠れて居りました。それからあのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も足の下になつてしまいました。此の分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外譯がないかも知れません。

犍陀多は両手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ来てから、何年にも出した事のない聲で、

「しめた、しめた。」と笑ひました。

ところが、ふと氣がつかますと蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ／＼へと一心に攀ぢのぼつて来るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに

大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへ断れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。もし萬一途中で断れたといたしましたら、折角此處までのぼつて来た此の肝心な自分までも、もとの地獄へ逆落しに落されてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。

が、さう云ふ中にも罪人たちは何百となく何千となく、眞黒な血の池の底から、うよ／＼と這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながらせつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに断れて、落ちてしまふに違ひありません。そこで、犍陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人ども、此の蜘蛛の絲はおれの物だぞ。お前たちは一體誰の許を受けてのぼつて来た。下りろ、下りろ。」と喚わめきました。

其の途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶらさがつてゐる處から、ぷつりと音を立て、断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云ふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくまはりながら、見るく中に闇の底へまつさかさまに落ちてしまひました。
後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きらりと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れて居るばかりでございます。

三

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶらくとお歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から抜け出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、さうして其の心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたが、お釋迦様のお目から見るとあさましく思しめされたのでございませう。
併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。其の玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはりに、ゆらくと蔓を動かしてをります。其のたんびに、真中にある金色の藥からは何とも言へない好い匂が絶間なくあたりに溢れ出ます。
極樂ももうお晝に近くなりました。(夜來の花)

七 パナマの鰐狩

いよく、華頂宮殿下の切なるお望が叶つて、鰐狩がパナマ碇泊中に行はれる事になった。一體が男らしき運動家であらせられる上に、武技

七 パナマの鰐狩

Panama パナマ共和国の首府太平洋岸パナマ市一度英人にやゝれたが一六七三年舊市の西約五哩の地に再建せられた。
Pauila
ヘトロアリス
一五九
Pauila
Pauila

華頂宮

博忠王
伏見宮博恭王の第二子
明治三十五年御生

十月十二日
大正十年

八雲
一等海防艦
排水量九七
三五噸

春日艦
一等海防艦
排水量七七
〇〇噸

に長ぜられ、殊に小銃射撃にかけては兩艦隊乗組の何れの士官も遠く及ばない程確實で鮮やかな腕前をお持ちの殿下の事だから、其のお喜は非常なものであつた。明後日はいよいよ鰐狩の日だといふ十月十二日の夕方、此の南海の果て漁業に従事して居る二人の邦人が八雲に尋ねて来て、鰐狩に就いての様々な話をした。殿下も後甲板に出て來られて、其の廣島辯まる出しの鰐狩物語を聞き入つてお出でになる。い、もう此處の鰐は至極溫和でございます、決して人に向つて來る事はありません。長いのは三間もあります。此の前春日艦が來られた時には五六十も撃たれましたが、なか／＼面白かつたでございます。勿論此の邊に住む鰐は特に資性濃厚であつて、此方から彼をして愕然たらしむる事さへ無かつたら、決して人に危害を加へる事はないのださうだ。併しパナマの古蹟オールド、パナマ——此處は今から四百年昔、遙か西班牙の彼方から小さな帆船を操つて此處に上陸した西班牙

モルガン
Morgan

人が、堂々たる城壘と市街とを作つて居た處へ、モルガンといふ者を棟梁とする英國の海賊船が大舉して押寄せ、一夜の中に焼拂つて其の財寶を掠奪し去つた遺蹟で、今でも其處の海岸には煉瓦とコンクリートの空突く様な古塔や邸宅の廢墟が、青い苔と雑草の中のそこ、に埋れて居る。其處の窓から或は西班牙の貴婦人達が椰子の木の間を隔てて蒼茫萬里の太平洋に落つる夕日や、銀波碎くる常夏の國の夕暮の海を嘆美したであらうと思はれる幾つもの窓といふ窓に、名も知れぬ雑草が蔓り、大きな蜥蜴が無氣味な姿でちよろ／＼と駈廻つて居る。殊に其の廣間のあつたらしい床の跡からは、直徑四五尺もありさうな巨木が、亭々として空を覆ふばかりに濃藍の葉を擴げて居る。日本などちがつて、徒らに土地廣くして人の少い中米の此の邊の事故、かゝる有名な遺蹟のほとりにも苔の深い朽木が右往左往に倒れて居り、猛獸の住みさうな叢が果てしも知らず續いて居る中から毀たれ

ミイラ 木乃伊と
は上の英
語を支那
語で誤つて
音譯した
もの
Mummy

た壁ばかりの大建築の名残が彼方此方に幾つも——丁度骸骨の眼窩を思はせる様な空虚な窓の開いた煉瓦の壁がミイラの様立つて居るのが、四百年の昔残忍な英國の海賊と西班牙人との血戦の物凄さをまざりと物語るのである。——話はあまり横道にそれたが、此の廢墟に數箇月前突如として一丈四五尺にも餘る大鰐が現れて、其處に悠々青草を食つて居た放し飼ひの牛に跳りかゝつた。不意を食つた牛は一たまりもなく物凄悲鳴を擧げて血に塗れて倒れた。獐猛な鰐は勝誇つた様に——丁度それは此處に一つの樂天境を開いて居た西班牙人を、モルガンの海賊船が一炬にして灰燼に歸し、燃え盛る焔と血潮の中から黄金や寶石や山の如き財寶を掠奪して去つた物語を其の儘であつたであらうあの恐しい長い尾を喜にのた打ちながら斃れた牛を食つて居たさうである。さういふ鰐を撃ちに明日は殿下がお出でになる事に決つた。

54
か
た
ら
し
ま
し
た

カーキー 印度語カ
ーケ(塵埃)より
出來た
語
Cutter 軍艦用の
小船
クルー 乗組員
Oar 櫂

十三日、いよいよ鰐狩の日になつた。殿下は早くもカーキー色作業服を召され、鰐狩の爲にパナマで求められた五連銃を頼に試みてお出でになる。お伴に隨ふ者は殿下附の石橋少佐、軍醫長平野少佐に少中尉各一名、岡田海軍教授外二名の便乗者と記者の八名だ。いづれも長靴を穿くやら、カーキー服を着込むやら、十分支度を整へて九時半にカターに乗込んだ。選ばれた八名の屈竟なクルーが大きなオールを折れよとばかり漕出す。

「御成功を祈ります。」
甲板から士官や候補生諸君が見送つてくれる。湖水の様なパナマ埠頭の海を横ざり、右に舵をとれば既に兩岸に緑の木立蒼茫たるパナマ運河である。

眞白い燈臺が一二町の間を置いて規則正しく兩岸に立ち並び、汽笛だとか様々の注意書を書いた立札が藍色に繁り合つた木の間にくつき

セマナマの鰐狩

五十哩
一八九二
一八九七
し
せ
ろ

りと白く浮いて居る。丁度上げ潮時なので、カッターは矢の速さで運河を遡る。河口を一町餘り上つて浚渫船の傍を過ぎると、運河と斜に交叉する狭い堀割が見える。フレンチ、カナルの跡だ。

「あれに這入つて撃つのだ。」

殿下はもう紺色の鳥打帽を後向きに被り舳に立つて、熱帯特有の青々としたマングローブがひた／＼と水中に枝を垂れ、枝から更に根を下して見渡す限りこんもりと茂り合つた陸の彼方を見てお出でになる。

「あゝ、鰐が居る。」

突如、クルーの一人が叫んだ。見れば運河の左岸叢の中から今這ひ出して来た長さ六尺餘りの鰐が、灰色に乾いた甲かぶらを見せながら大きい足でのそ／＼と岸を下る。

「残念々々、カナルの中でなかつたら、早速撃つてやるのだがなあ。」

殿下は残念さうに双眼鏡で其の初対面の野生鰐の姿を眺めてお出

フレンチ、カナル

French-Canal

マングローブ

Mangrove 熱帯海岸に生ずる樹

になる。其の中に鰐はもう水中に入つて、眼と鼻の頭だけを水面上に現しながら泳ぎ去つた。

艦を出てから十分も経たないうちから鰐の姿を見る様では、今日は餘程居るに相違無い。といふので、皆昂奮してはしやぎ出した。ボートは水を切つて左へフレンチ、カナルに入つた。幅は十五六間もあらうか、兩岸は全くマングローブの濃い緑に深く／＼覆はれて居るので、元來が暗く濁つた淀みの様な水に、枝といふ枝が垂れ下つて根を下して居る有様が、一種言ひ様のない、暗い物凄く感じを與へて居る。次第に遡ると河幅は五六間に迫り、鬱々たる木の繁りはあたりを暗く鎖して鰐の住む淵らしい凄く光景となつた。殿下は舳にライフル五連と鳥打の銃を置かれて、絶えず叢の中を注視して居られる。皆ひつそりと聲を吞んで、マングローブの枝の様々に錯綜せる兩岸の水際を警戒する。見て居ると、羽の美しい蝶が寂寞たる暗い森の彼方此方を音もな

ライフル 旋條銃 Rife

く舞つて居る。

「上にかぶさつて来る木の枝に氣を付けて。此處には胴廻りの二尺もある大蛇が住んで居るのだ。」

石橋少佐が注意を與へる。すると忽ち舳で殿下が第一弾を放たれた。森の繁みの中から飛び立つた白鷺が、先づ彈丸の小手調べに撃たれてひら／＼と水面に落ちて來た。それから鳴や、水鳥の類が出て來る毎に悉く殿下の銃で射留められた。併し肝腎の鰐は影も見せない。

「おい、鰐の發見者にはサイダー一本出すぞ。」

石橋少佐がどなつた。「さあ、俺が先づ發見しなければ」といふ顔で、皆暗い水際の邊を見廻し始める。間もなく水兵の一人が、

「鰐・鰐！」と叫んだ。

其處は泥土の沼の様な此の邊に、珍しくも平らな大岩が岸から突き出して居る場所で、其の上の方には茅に似た草が茂つて居る。

「何處に／＼。」

「あゝ、あそこです、あゝ、もう尾が見えなくなつた。叢の中に這ひ込みました。」

「何だ、早く船を岩に着けえ、早く／＼。」殿下はライフルを小脇にして起ち上りながらいらだつ様に叫ばれる。

舳が岩に着くと同時に殿下のお姿はもう岩上に在つた。

「どの邊か／＼。」と尋ねられつゝ、

「おゝ、足跡があるぞ。此の水際から這ひ上つたのだ。鰐の足跡だ。」と叫ばれ、銃を構へてじつと叢の物凄い邊を覗かれる。

「殿下お危うございます、船にお歸りにならないければ！」

「何が其處から飛び出すかも判りません。」

艦の方に居た軍醫長と宮附の三好野君が聲をはづませて叫ぶ。

「なに、大丈夫／＼。」

と銃では十分御自信のある殿下は、飽くまで鰐の足跡に目を付けて叢
の方を狙つて居られる。水兵の一人も殿下に萬一の事があつてはと
岩に飛び移つた。

「殿下お歸り下さい。」

石橋少佐は聲を勵まして叫ぶ。殿下も遂に微笑を含まれながらポー
トに歸られた。

此の日の鰐狩は遺憾ながら是程殿下の御熱心があつたに拘はず不
成功に了つた。長さ一尺五六寸位の小鰐を發見して撃たれたが、一二
寸の差で命中せず、蜥蜴の様な速さで叢深く逃げた。其の中に長さ二
尺位の蜥蜴の一種で、全身は燃える様な新緑色の硬い甲に覆はれ、背に
長さ五分位の緑色の針が丁度馬の鬣の様に肩から尾の先まで生えた
凄い奴が木の枝に止つて居るのを、殿下は只一發で撃ち止められた(コ
マドレジャと稱する蜥蜴類ださうだ)が、其の甲の緑の無氣味さ、姿の物

Squall
スコール

凄さに萬一毒でもあつてはと、これもお附の石橋少佐や三好野君が大
騒ぎの結果河に捨てられた。——後で聞くと土人等は此のコマドレジ
ヤの肉を鳥肉より美味だと云つて食べるさうだ。

其の中に熱帯特有のスコールが猛烈に降り出す。ボートに幕を張り
岸に繋いで雨中に辨當を食べる。厚い麻の幕だが、車軸を流す様な豪
雨なので、ぼた／＼と天幕を透して雨が落ちかゝる。快活な殿下はす
つぽり外套を頭から被られて、雨の落ちる下で甘さうに食後の煙草を
吹かしながら談笑の仲間に入られる。萬目皆緑、鰐の住める淵に船を
繋ぎ止めて、辨當を食ひ、サイダーを飲み、果物を食ふ。

「何だか此處が日本から七千哩も離れて居る様な氣にはならないね
え。」

誰かさう言つた様に、蕭條たる雨に煙れるフレンチ、カナルの岸邊で、
皆は何となく無人境の静寂さに誘はれて眠くなる程ゆつたりとした

セバナマの鰐狩

セイシヤク
レスターヒヤク

気分になつた。水兵達は平常忙がしいため、隙さへあれば眠る癖がついて居るのでもう假睡の夢に入つて居る者もあつた。一時間あまりで雷鳴を残して雨も上つた。再びオールを上げて進んだが、早くも潮は矢の速さで引き始めた。

「おい、米國の軍艦が……。」

見れば遙か彼方フレンチ・カナルが運河に續く處に、豫て知られて居た米海軍の巡戦艦コンネクチカットが今や大西洋から運河を過ぎて太平洋艦隊と合すべく、パナマに向けて静々と進んで行くのだつた。もう潮が引き始めては鰐も絶望だつた。路々殿下が十數羽の水鳥を撃ち落されたのを後にして、ボートは午後四時半に八雲に歸つた。

(東京朝日新聞)

五十嵐力

國文學者
文學博士
早稻田大學
教授
明治七年山
形縣米澤市
生

八 明月の影を二つに割つて 五十嵐 力



五 聞える。私は一日の勤勞の貴い汗を洗ひな
十 風 がす爲に、柿の木の傍に据ゑてある浴槽の蓋
力 を取つて入らうとした。濛々と立ちのぼる

湯氣の中に、玉のやうな月影が靜かに憩うて
ゐた。仰げば十五夜の月は天にかゝつて、我が家をも柿の木をも浴槽
をも私の體をも白く照して居る。

私は月の住んでゐる浴槽に入りかねて、暫くそれに見とれて居た。や
がて靜かに手を入れると、まん圓な月影が波の爲にさら／＼と崩れて
形がなくなる。暫くして湯の面が平になるにつれて、又もとの玉の姿

八 明月の影を二つに割つて

になる。此の時、私は實に繪にもかけない美感に打たれた。思ひきつて此の明月の影を二つに割つて、月と共に一つ湯に入つた。月は大空に光を放つて笑つてゐる。

白い月の光を浴びながら、靜かに湯の中に冥想して居ると、傍の叢にすだく蟲の音が何とも言へぬ程面白く聞える。體を洗はうとして手拭を動かすと、其の音と共に蟲の奏樂がはたと止む。また靜かに體を湯の中に沈めてゐると、再び涼しい蟲の音が、まるで銀の鈴でも振るかのやうに聞え出した。私は此の時始めて、

行水の
伊丹鬼貫の
句

行水の捨てどころなし蟲の聲。
といふ句の味を悟つた。

湯上りの膚を涼風に吹かせてから、蓋をしようと思つて近寄ると、平靜にかへつた浴槽の中には、又しても月が玉の様な清い姿を沈めてゐる。

(作文三十三講)

九 海邊の墓

西條 八十

海邊の墓は
寂しかり。
訪ふものは
風さむみ、
ゆふべくの
磯がらす。

海邊の墓は
悲しかり。
かざれるものは
ほの紅き

九海邊の墓

濱畫顔の

花ばかり。

(海邊の墓)

一〇 難船

相馬御風

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年
新潟縣糸魚
川町生
六月十二日
大正六年



相馬御風

これも矢張先日の暴風浪の時に起つた事件で、場所はあの有名な親不知附近であつた。あの時の俄か荒れは六月十二日の夕方から起つたのであるが、翌十三日の朝九時頃になつて、僕のところから西へ三里ほど離れた親不知海岸へ乗り上げた五艘の漁船があつた。いづれも越中宮崎村の漁船であつたが、幸ひ乗手は皆生命に別條はなかつた。併し彼等は皆

暫くは起つ事が出来ないほどに疲れもし、餓ゑもして居た。

ところが彼等が救助されてから間もなく、またしても一艘の小形漁船がその濱へ漂流して來た。しかし今度のは船が小さいのと、乗手が僅かに二人しかゐらないのと、しかもその二人が既に極度の疲労に達してゐるらしいとの爲に、とても彼等自身の力で岸近くまで乗り上げる事が不可能であるやうに見えた。それでその附近の村民は大擧してその哀れな漂流船一艘を助けようと集り騒いだけれども、荒れ狂ふ大浪に氣を吞まれてたゞ徒らに騒ぎ廻るだけで、誰一人波を潜つて救助に向ふべく奮起し得るものがなかつた。しかも漂流しつゝある二人の漁師の命は刻々に危険に瀕するばかりであつた。

折も折、突如として彼等の間へ割り込んで來て、その役目を自分にまかせてくれると申し出た二人の男があつた。見ると、それはつい數刻前に救ひ上げられた越中の漁師であつた。その二人は年はまだ若く、身

體も頗る強健さうに見えたのであるが、何にせよつい今の今まで綿の如く疲れて臥て居た人達であつた。人々は一時は喜びはしたものの、ひどく危まないうては居られなかつた。しかし二人は云つた、俺たちはどうせもう死ぬものと覺悟して居た命をかうして助けてもらったのだから、死んだつもりで乗込んで見よう。漁師は相身互だ。こんな場合に黙つて見て居てはすまん。そして二人は咄嗟の間に救助船に乗込んですさまじい怒濤の中へ分け入つた。併し不幸にもその瞬間かの漂流船は重なり來つた大浪に吞まれて、見る間に姿を没してしまひ、折角奮ひ起つた二人の苦しい努力もつひに水泡に歸してまつた。二人の努力はかくしてつひにその甲斐がなかつた。しかし彼等の示した美しい同情と勇氣とは人々の胸に深い感銘を與へた。「これこそ眞の同情だ。これこそ眞の犠牲的行爲だ。そして其の勇氣と力とは何といふ美しさだらう。今にも死にさうにまで疲れ切つて居た體の

どこから、それほど勇氣と力とが出たのだらう。不思議な勇氣だ、不思議な力だ。多數の疲れない丈夫な人達の中からつひに湧き起らないで、綿のやうに疲れて居た人達の中から突如として湧き起つた其の勇氣と力とは何と云ふ崇高な表現だらう。僕はその話を聞いた時に幾度となくさうした感嘆の聲を繰返さないでは居られなかつた。そして更にさうした感激がやゝ長くつゞいた後で、僕は「その二人の漁師だとして、恐らく平常は一向つまらない人達なのであらう。或はむしろ善くない方の人達でないとも限らない。しかも機會に遭遇すれば突如として彼等の内部からさうした崇高な同情と勇氣と力とが湧き上て來る。それは何某と云ふ固有名詞を持つた特定の人物のものであるよりも、むしろ人間そのもの、奥底にひそんで居る尊さなのだらう。いづれにしても驚くべき事實だ、崇高な事實だ。」こんな事をも思つた。けれどもかう云つたやうな事實があるからと云つて、僕は漁師等の生

活情態そのものが善良なだけ純潔なものだなどと云ふのでは決してない。むしろ彼等は單純であるだけ、それだけ美しさと同時に醜さをも露骨に示し勝ちである。だが僕は今さうした事について語つてゐるのではない。むしろ今の場合、僕自身としては彼等の如き單純に生きる人達の生活の上に、時あつて表現される善良なもの美しいもの、感化を、能ふかぎり僕自身のたましひに受け容れ得ることをより多く希求して居るのだ。他人の救よりもむしろ自分みづからの救を求めて居る今の僕にとつては、これより外に途がないのだ。(樹かけ)

江見水蔭
名は忠功
文學者
明治二年岡
山市生
こ、
甲斐國郡留
郡上吉田
富士登山の
北口

一一 金剛杖

江見水蔭

七時半に、こゝを出發、それから富士嶽神社に參拜した。こゝの朱塗の

こゝの朱塗の
富士嶽神社
甲斐國郡留
郡上吉田
富士登山の
北口
こゝの朱塗の
富士嶽神社
甲斐國郡留
郡上吉田
富士登山の
北口

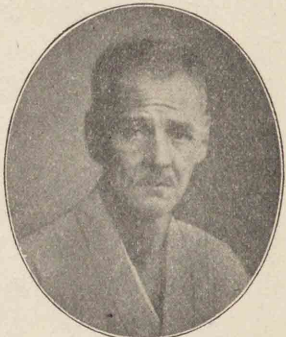
富士嶽神社
上吉田の淺
間明神
三國
日本・唐・天
竺

良恕法親王
後陽成天皇
の皇弟
山城國曼殊
院門跡
寛永二十年
(一一三〇三)
寂
年七十
麗水
暹羅金太郎
文章家
竹風
登張信一郎
獨逸文學者
金風
長井行
漢學者
東禹
織田氏
畫家

大鳥居は、實に見事である。兩柱の間が六間餘、上に「三國第一山」とある。

額の筆者は、良恕法親王と傳へてある。こゝ

江で、他の人々が記念印を捺してもらつてゐる間に、余はひとり舞樂殿に上つて金剛杖を、突き立てなどしてゐると、草鞋で、そこへ上つて



はいけません」と、神職から眼玉を喰つた。こゝ

の失策誰も知らず。

社の背後から、鈴が原といふに入つた。雲低く、雨細き草の野原は、景色また格別である。後列から先頭を見ると、一人々々影が薄れて行く。

麗水子よりも、竹風子の姿が薄く、竹風子よりも、金風子がまた薄い。ずつと前の東禹子は、朦朧として、はや見分け難いのである。されば、また、先頭の畫伯が、逆に後列の方を顧みて、寫生帖に余の姿を入れるには、たつた薄墨の一筆に、さらさらと畫いてしまふであらう。

一里にして、中の茶屋に着いた、それが九時。すると、こゝに雨宿りの行者連や、下りの馬子、強力などが、口々に天候不良を説いてゐる。「今日は、大變御山が荒れてゐる。この様子だと、まづ二三日は登山が出来ない。御山を知らない者は、先へ〜と行きたがるが、かういふ時には、下で待つてゐるに限る。室へ押籠められて、きう〜いつてゐるより、どのくらゐいゝか知れない。」など、山馴れ顔の先達が聞えよがしの高話し。聞きながして、こゝを出發すると、この邊はもうだら〜のぼりて、大分平地より高くなつてゐるので、風は強く、絲立の袖を拂ひ、雨は繁く菅笠の廂を打つ。

經麻、繙、葦、菅、笠

降りて來る連中は、みな失望の色である。中に汽車で見知の人が居て、自分たちより早く立つたのが、もう歸途に就いてゐる。

「とてもだめですぜ。馬返で警官がとめてゐます。よほど、山は荒れてゐるさうで、な〜といひ捨て、せつせと吉田へ降つて行く。」

光景暗澹、形勢不穩、こんな字を用ひてもいゝやうになつた。

十時三十分に馬返に着いて見ると、こゝの混雜といふものは非常である。白衣の行者、黒衣の學生、三軒の茶店に充満してゐる。その充満が混亂を極めてゐる。まるで戦争だ。それも勝利の方ではない、負けて陣地を引揚げる時の光景だ。山からは、續々走り降つて來る。みな目的を達せずして、三四合目から引つかへすのである。

こゝに巡查派出所があつて山から電話が懸つて來る。そこで聽いてみると、山上は大暴風雨です。石が雨といつしよに吹上げられてゐます。五合目から上へは、とても登れません。五合目から下の室は大概満員です。今、下の分署長からも電話がかゝりまして、非常に危険です。からなるべくあなたもお歸りなさるやうにといふことで……と、氣の毒さうに答へられた。

こゝで、同行九人の間に議論が起つた。先達のおどかし、警察の忠告、かう重なつてくると、登山の危険について、つくづく、恐をなして、吉田口へ歸らうといふ説が大分出た。

森山
名は武
寫眞師
高見
名は勝
春陽堂店員

この軟説主張者が誰々であるかはいふまい。しかし、硬派の面々だけは發表しよう。それは、森山・高見の二氏、それに自分とて、九人の内から、この三人を減ずれば、軟論者の誰々であつたかといふ答案は、すぐ出る筈である。

「進むべし。」の一語、澁面作る三人の強力を勵まして、いよ／＼余等は馬返を發した。警官たちも行者連も皆無謀に驚いてゐる。

若

鷺山若風
毎日電報寫
眞班
太田醫學士
名は孝之
今は醫學博士

瀧を造る坂道。盆を覆す豪雨。

ふり向いて見ると、後から麗水子が来る、竹金・若の三風子も来る、東禹畫伯も太田醫學士も皆續いて來るのである。さては、前の軟説は笑談にいつたのであつたか。然り、全く笑談だつたのであらう。まづ、さうし

ておく。

馬返から五合目の少し上までは、いはゆる喬木帯である。その間に立派な新道が通じてゐるので、馬でも樂に行かれるのだ。

だが、吾々は馬を捨て、徒歩で二合目の小室淺間神社まで駈け登つた。それが十一時四十分。こゝで、扇子端書などに記念印を捺してもらつたが、神官らしい人が二三人ゐて、われ／＼の強行登山を驚き且危み、今日はまだまあおよしなさつた方がよいでせう。」と、とめてくれた。

好意は謝したが、登山は決して斷念しなかつた。二合五勺から三合目にと到達した時に、風強く白雲を切つて、森林の間から纔かに裾野をあらはした。「さあどうだ。天氣はもち直すぞ。」と、余は叫んだ。

今迄の悲觀者は忽ち樂觀者に變つて、「いゝな／＼」の聲は、口を衝いて出た。

正直なる東馬畫伯はわざ／＼冠れる笠をとつて、實はなあ馬返では、あなたが憎らしかつた。しかし、かう天氣が變つて見ると、吉田へ還らなくつてよかつたですよ。謝しますよ。ほんとにあなたはい、人だ……と謝すのか、冷かすのか、分らぬことを口にして喜ばれた。

が、悲觀は忽ち樂觀、樂觀は忽ち悲觀。霽れるかと見れば、すぐと降り出し、降ると思へば、すぐと霽れる。

麗水子と太田國手とは、既に數回の登山をした山通である。その山通の言によると、その晴雨定まらないのが甚だ好くないといふ大の悲觀説で、なるほど經驗に富んだらしい多數の行者連は、室といふ室にぎつしり詰つてゐて、一人も外に出て居ない。登つて行くのは、われ／＼九人と三人の強力のみだ。

四合五勺の小屋に達したのは午後一時。こゝからの眺望を貪るに便

武甲山

武藏國秩父郡大宮町の南に峙つ山高千三百餘

川口湖

甲斐國都留郡富士八湖の一

ならしめる爲に、室の前の木柵に懸札がしてあつて、筑波山・武甲山・川口湖・馬入川・東京・甲府など、その方位を示してあるけれど、雲漠々として、何物をも見ることが出来ない。その懸札の文字さへも、時には淡くうすれる。鼻の先を雲が行くのである。

竹風子、忽ち叫んで曰く、

「小屋の屋根から雲が涌いとるぞ。」

麗水子、これに和して曰く、

「みんなの笠からも雲が涌いてるぜ。」

雲は脚絆からも草鞋からもむれ立つて、直ちに富嶽の大觀を覆ひつゝある。一同こゝで名物の水飴を味はつたが、なか／＼うまかつた。九人の紳士が子供のするやうに箸の先につけて飴をしやぶる。中には髭を汚して困つたものもあつた。

この間、金風子はしきりに植物を採集してゐるので、誰やら胴籠を覗き

こみ。

「これはなんといふ花です。」と問を試みると、金風子は、平然として、

「家へ歸つて、本を見んと」わからん。」

五合目に着いたのは二時三十分。まだ日没までにはよほど登れるのであるが、こゝにも新設せられてある派出所の警官が、八合目よりの電
話に照して、到底こゝからの登山、思ひもよらずと説かれたので、残念な
がら一行はこゝに宿することゝした。

なるほど金剛杖一本突き入れる處もない。室といふ室は満員である。
講中も居る、團體も居る。田舎者も江戸兒も學生も紳士も行者も強力
も皆緋小屋に緋を積んだやうになつて籠つて居る。

其の中へ無理に割り込んだ我々九人が、如何にしてこゝに一夜を明し
たらうか。(金剛杖)

夏目漱石
名(金之助)

英文學者
小説家
東京生
大正五年歿
年五十

一二 猫

夏目 漱石



夏目漱石
あつた。どこへ行つても撥ねつけられて、相手
にしてくれてがなかつた。如何に珍重され
なかつたかは、今日に至る迄名前さへつけて
石くれないのでわかる。吾輩は仕方がないか

吾輩がこの家へ住みこんだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望で
に居る事をつとめた。朝、主人が新聞を讀むときは、必ず彼の膝の上に
乗る。彼が晝寢をするときは、必ずその背中に乗る。これはあながち
主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから、已むを得
ないのである。その後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣
のよい晝は縁側に寝る事とした。しかし一番心持の好いのは、夜に入

つて、このうちの子供の寢床へもぐり込んで、一緒に寝ることである。この子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へはひつて一緒に寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき餘地を見出して、どうにかかうにか割込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を覺すが最後、大變な事になる。殊に小さい方が質が悪い、猫が來た、猫が來た。といつて、夜中でも何でも大きな聲で泣きだすのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼を覺して、次の部屋から飛びだしてくる。現に先達てなどは、物指で尻をたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して、彼等を觀察すればする程、彼等は我が儘なものだと斷言せざるを得ない様になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつゝひの中へ押込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら、家内總がか

りて追ひまはして迫害を加へる。この間も一寸疊で爪を磨いたら、細君が非常に怒つて、それから容易に座敷に入れない。臺所の板の間で他が顛へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向ふの白君などは、逢ふ度毎に、人間程不人情な者はないと言つて居る。白君は先日玉のやうな子猫を四匹産んだのである。ところがその家の書生が、三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて、四匹ながら棄て、來たさうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても、我等猫族が親子の愛を全くして美しい家族的生活をするには、人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといった。一々尤もな議論と思ふ。又隣の三毛君などは、人間が所有權といふことを解して居ないといつて大いに憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも縮の臍でも、一番先に見附けた者がこれを食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手がこの規約を守らなければ、腕力に訴へてもよい位なものだ。

然るに彼等人間には毫もこの觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は、必ず彼等のために掠奪せられるのである。彼等はその強力を頼んで、正當に吾人が食ひ得べき物を奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は辯護士の主人を持つて居る。吾輩は學者の家に住んで居るだけ、こんな事については、兩君よりも寧ろ樂天である。唯その日ノノがどうにかかうにか送られ、ばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。(漱石全集)

宇野浩二
本名格次郎
小説家
明治二十四
年福岡縣博
多生

一三 搖籃の唄の思出

宇野 浩二

或國の蠻地に近い或山の麓に、家數は僅か二十軒にも足りない小さな

村があつた。その村はづれに正直者といふ評判の夫婦と、その間に生

れたお千代といふ、その時三歳になるかはい

らしい女の子と、親子三人暮しのむつまじい家があつた。



宇野 浩二

指折數へると、今から丁度十五年前の冬の初

めに思はれてゐるこの土地でも、十一月末といへば、況してそんな山里のことだから、蟲の聲さへ日毎にうら枯れて、夜になると凄い程さびしい時だ。

裏の山の端に小さな月が出てゐた。それを背にしてお千代の父は流場で、明日の仕事の用意にとて斧を磨いでゐた。家の中では薄暗いランプの下で、お千代の母が冬着のこしらへに忙しく針を運ばせてゐた。その母の頭の上に、丁度ランプと反對の位置に一つの新しい搖籃が吊

Lamp
ランプ

つてあつて、其の中に小さいお千代が眠りかけてゐたのである。母は小さな聲で子守唄をうたひながら針の手をつづけてゐるのだが、時々思ひ出してはその針を持つたまゝの手で搖籃を動かすのである。と、搖籃はしばらくの間母の子守唄と調子を合はすやうに搖れるのであつた。

「静かな晩だな。」

と丁度斧を磨ぎ終つた父が、今まで屈めてゐた腰を痛さうに伸しながら聲をかけた。

「あすもいゝ天氣だらう。」

「静かに！」

と母はたしなめるやうに、やつぱり針を持つたまゝ、ものを抑へるやうな手つきをして言つた。

「今お千代が寐かゝつてゐるところですから……。」

そしてまた母は静かに子守唄をつづけるのであつた。父も静かに砥石を片附けたり斧をしまつたりしてゐた。

折から戸外の遠くの方から穩やかならぬざわめき聲が起つた。で、お千代の父母は思はずその方に耳をそばだてると、聲は段々と大きくなり、段々と近づいて來た。そして次第にはつきりと人々の叫ぶ聲、泣く聲、足音などが聞えて來た。

やがて、何事が起つたのかと確める暇もない中に、

「蠻人だ！ 蠻人だ！」

と叫ぶ聲がした。

父は慌しく家の中に駆け込んで壁から銃を取下し、それから短銃を母の手に渡した。

お千代はその時すつかり寐入つてゐた。そんな人々のわめき聲に眠を醒さない程よく眠つてゐた。父は狼狽しながら寐てゐるお千代に

氣をとられて立ちすくんでゐる母を無理やりに引連れて、ひと先づ戸外に出た。

丁度二人の者が戸外に出た時、そのわめき聲が一層大きくなつて、折から鐵砲の音とともに、數多の村人達が逃げて來る所であつた。そしてすぐ後から生蕃の追つて來る氣色がした。

「大變だ！大變だ！大變な數の蠻人だ！すぐ逃げなければ危い。」
で、父は、やにはに母を肩にかけて、皆の人々と共に走つた。

「お千代を！お千代を！」

と母が泣き聲になつて叫んでゐるのも氣にかけてゐられない程、父も、皆の者も夢中で駆出したのである。

さうして漸く皆の者は無事に隣の村まで逃げ延びた。しかしお千代の母はそこに着いた時には氣絶して居たのである。無事に逃げて來た人の中にも、子供を連れ出した人は稀であつた。子供の愛に牽かさ

れた人は大抵逃げ遅れてしまつた。お千代の母とても、その時無理に背負はれて逃げなかつたなら、きつとお千代と共に、その時限り行方不明になつたか、或は他の多くの人達のやうに、首だけ持つて行かれて、殺されてゐたに違ひない。

——これは前にも言つた通り、今は昔十五年前の出來事である。その當時はお千代の父母も殆ど御飯も喉に通らぬ位に悲しんだけれど、やがてお千代の妹や弟たちも生れ、今ではもうその一番上の妹が十二になつてゐた、その外に九歳になる弟と五歳になる妹も出來てゐるので、お千代の事は次第に死んだものゝやうに悲しさも薄らいで行つた。そしてたゞあの騷動の日を命日として懇ろに後の弔をしてゐたのであつた。

お千代が昔寢てゐたあの搖籃は、もう古びてしまつたけれど、昔のまゝの處に吊られて、今は一番末の妹のお露のものになつてゐる。父はや

つぱり毎日夜になると裏の流場で斧を磨いては、それが済むと、晝の疲れに早くから寝てしまふ。母は子供が殖えたので、殊にこの冬の初めには子供等の冬着の支度に忙しく、每晚遅くまでラムプの下で針仕事をしてゐる。たゞ十五年前と變つたのは、近頃町から買つて來た新しい錫の壺の、今迄のよりは、つと綺麗なつと明るいラムプと、それに宵の口には搖籃をゆする者が、針を持つ手の忙しい母ではなくて、一番上の姉のお小夜になつた事である。それに年毎に開けて來て、今は蠻人の襲來することなども稀になり、又よし襲うて來ることがあつても、それを防ぐだけの備へも出來た。

ところが、その十五年目の冬の初めの頃である。又もや殆ど隔日位に、その邊の村々を順々に襲ふ蠻人の一隊が現れた。そしてその度毎に村では幾人かの死傷者を出すのであつた。

この蠻人の一隊は數は餘り多くはないが、驚くほど荒々しくて、しかも

その隊長は馬に乗つた少女だと云ふ事であつた。のみならず、その少女は確かに内地の女であるといふことが誰言ふとなく傳へられた。そこでお千代の村では一層警戒を嚴重にして、尙出來るならばその一隊を攻め滅さうと用意をした。

ところが到頭その蠻人の一隊が襲つて來た。それは、不思議にも、お千代の命日に當る晩であつた。丁度十五年前の晩のやうに、裏の山の端には小さな月が出てゐた。

「そら來た！」

と云ふので、村の家々は皆戸を閉めて、そして働き盛りの男ばかりが、鐵砲をもつて蠻人を迎へて戰つた。

今度は用意も出來てゐたことゝ、蠻人の方が負けて逃げた。村の男たちは勢よく鐵砲を放ちながら、それを追つかけた。逃げながら撃たれて仆れる蠻人も澤山あつた。その中に此方から打出した一つの彈

丸が、その隊長の少女の乗つて居る馬に中つた。で馬諸共にその少女は眞逆様に地上に轉がり落ちた。そこを追ひつめられて、少女は烈しく抵抗つたけれども、何といつても女の身の、しかも多勢に無勢で、その時遂に生捕にせられたのであつた。

評判な蠻人の隊長の、内地の女がつかまつたと言ふので、その翌日は村の人々は言ふに及ばず、一里も二里も離れた隣村からも、人々が大勢見物に來た。ところが不思議な事には、その蠻人の隊長は、十五年前、三歳の時にこの村から攫はれて行つたお千代だと言ふ噂が人々の口から口に傳はつた。年齢は十八九で色こそ黒いが、綺麗な娘である。それに右の眉の横にある疵痕までが、お千代に違ひないと言ふのである。そこで、村の總代からお千代の父母を呼びに來たのと、噂を聞いて二人が取るものも取りあへず出掛けたのと殆ど同時であつた。お千代の父母は呼吸もつまるかと思ふ程胸の騒ぐのを覺えた。その二人が村役

場の庭に馳けつけた時には、折からその女蠻人を取巻いてゐた群集は俄かにどよめいた。そして誰が命令するともなしに二人のために道を開いた。群集から三間と離れてゐない所に、蠻人の服装した女が、恥しげもなく、それどころか恨めしさうな鋭い目つきをして、後手に縛られたまゝ、あたりをじろくくと見廻してゐる。その傍に五つ六つの椅子があつて、村長と村の總代たちが腰を掛けてゐた。

お千代の父母は夢中でその前に飛出した。あたりは急に水でも打つたやうに静まり返つた。その縛られてゐる女の前に、父は釘付けにされたやうに立つて、じろくくと無神経な顔をしてゐるその女を見つめてゐた。母も亦その傍に寄つて、相手の鷹のやうな鋭い目を避けながら、しげくと眺め入つた。

突然、母は其の前に仆れるやうに膝をついて、何事か口の中で言ひながら泣出した。それと共に父は一步村長の前に進んで、小さいけれどき

つぱりとした聲でかう言つた。

「これは確かに娘の千代です！」

そして父も亦頭を垂れた。

今まで黙つて見てゐた大勢の人たちは、急にざわ／＼と騒ぎ始めた。

そして口々に何か話し合つた。

「静かに！」

と逡巡は椅子から立つて人々を制した。

「お千代や！ お千代や！」

とこの時母は堪り兼ねて、人目をも恥ぢず泣きながら言つた。

「お千代や、よく生きてゐてくれた。これ、わたしが分らないか？ 母

さんだよ、分らないか？ 分らないのも無理はない、三歳の時に別れた

まゝだからね、お千代や、私はお前の母さんだよ、そしてこゝにお前の父

さんも来ていらつしやるのだよ！ お千代や……。」

しかし、お千代と呼ばれて、泣きながら話されるのを、却て不思議さうに見返しながら、かの女は黙つてゐる。

「お前はもう私等の言葉が分らないのか、忘れたのか？ 無理もない、

三歳の時のまゝだからね……。」

母は流石に女心に果てしもなく、我が子と思つて搔口説くのであつた。

その時通辯人が傍に来て蠻人の言葉でお千代にかう話しかけた。

「お前の名はお千代と云つて、言はずとも知つてゐようが、もとは内地

人だ。それどころかこの村で生れて、この村で育つたのだが、三歳の時

蠻人に攫はれて行つたために今のやうな身になつたのだ。こゝに立

つて居られるのはお前を生んで下すつたお父さんとお母さんなのだ

よ。」

通辯がかう言ふと、かの女はぶつきらばうに頭を振りながら、蠻語で答

へた。かう言ふのである——

「わたしは蠻人だ、内地人ぢやない。わたしには父母などはない。わたしは内地人は嫌ひだ。わたしは蠻人だ！」
これを聞いて母は聲を上げて泣いた。そして父はやつぱり釘付けにされた様に、立つたまゝ一言も口をきかなかつた。
色々の通辯の口を通じて、すかしたり、威したりして見たけれども、彼女はたゞ、

「わたしは内地人は嫌ひだ、わたしは蠻人だ！」
と繰返すだけであつた。

そこでふと思ひ付いて、この女を、その生れた家の前に連れて行くことにした。そしたらどうかして、幼な心に映つたことを思ひ出して、氣心も優しくなるかも知れないと思つたからである。

先づ村長と村の總代たちが歩いた。その次にお千代の母と父とが續いた。それから巡查がその蠻人の女を連れて従つた。數多の見物人

が海嘯のやうにその後から押寄せた。

漸く村はづれの古びた、小さな家の前に來た。家の前には三本の大きな檜の木が並んで生えてゐた。

「お千代や。」
と母は其の木の根元に立つて、その梢を見上げては又かの女蠻人を見ながら云つた。

「お前はこの木を覚えてゐるかえ？ お前が毎日、この木に止つて喧しく鳴いてる雀を取つてくれと言つては、お母さんを困らした事を忘れたのかえ？」

それを通辯は傳へた。しかしかの女は冷やかに答へた。

「そんな事は知らない。知つてゐる筈がない。」

その頑固な言葉に人々は途方に暮れてしまつた。見てゐる數多の群集も追々と疲れて來たと見え、欠伸をする者や、悪口を言ひかける者も

出来て、次第にあたりが騒しくなつて来た。

「やつぱりあれは内地人に似てゐても實は蠻人の娘なのだらう。てなければ十八や十九の年であんな強情な娘があるものか。」

と一人が言つた。

「さうだ、それをあれがお千代などと誰かゞいゝ加減なことを言つたんだらう。若し本當にお千代だつたら、あれ程母親が涙をこぼして話してゐるのを、それに皆があゝして事をわけて言つて聞かせるのを、少しは分りさうなものぢやないか！」

もう一人が言つた。

「しかし現在の母親が人目もかまはず搔口説いてゐる程だもの、まさか人違ひでもあるまい。それともまた、生みの親より育ての親といふ諺もある位だから、それに、此方では、何も知らない時分に三年の間育てられたのを、彼方では、十年以上も育てられたのだとすれば、よし氣がつ

いても早速名乗つて出られまいぢやないか。」

かう年寄の男が言つた。

「成程、さうかも知れないな。」

と二三人の者が賛成した。

「全くそんな譯かも知れない。して見ればあんな蠻人のやうな者に育てられたのだから、自然氣も荒くなつてゐるだらうし、そして十五年も前の事だし、その上こちらにゐた中は何も知らない子供の時分なのだもの、本當に蠻人の子だと思つてゐるのかも知れない。」

「でも、『わたしには父母はない』と言つたぜ。それに如何にも憎々しうに『わたしは内地人は嫌ひだ。』と言つたあたりは、どうも意地からさう言つてゐる様子だつた。ひよつとするとあれは蠻人の方へ義理立てをして、そのために此方で言つて聞かせる事はすつかり分りながら、あんな風をしてゐるのかも知れないよ。」

こんな風に噂は口々にとりつてあつた。その中にも、父は流石に男らしく何も彼もあきらめたやうな顔をして、併し悄然と立つてゐたが、その傍に母は流石に女の身の矢張あきらめかねて、しかしもうその上いふ言葉もなく泣きながら立つてゐた。村長や村の總代たちも當惑したやうに同じくその傍に立つてゐた。ところが肝心の女は、一向皆に頓着なしに、きよろ／＼とその鷹のやうな目で、隙があつたら逃げてやらうと言つた風であたりを見廻したりしたかと思ふと、懐かしさうにかの生蕃の住む、自分等の山の方を眺めたりした。

「これ程までに言つても、お前は何も白状しないのか？」
遂にかう通辯が言つた。

「殺すなら殺してくれ。」

と、女は少し聲を荒らげて答へた。

「くだい事は言はないで、早く片付けてくれ！ 逃すものなら、早く私

の山に歸してくれ、そしたら今度はもつと大勢つれてくるから。それが恐しければ殺しても好い。兎に角ぐづ／＼言はないで早くどつちかに片を付けてくれ！」

通辯はこの言葉を皆に通じた。皆のものはたゞぼんやりとしてしまつて、返す言葉がなかつた。そこで暫くあたりが静まりかへつた。

その時、家の中から静かな子守唄が聞えて來た。家の中では五歳になる末の妹のお露を、姉のお小夜が寐かしつけてゐるのであつた。小さいお露をあの搖籃に入れて、それを揺りながら、お小夜は母に代つて、搖籃の唄をうたつてゐるのである。

その同じ搖籃の中から、十五年前の昨夜お千代は攫はれて行つたのだ。その同じ搖籃の中で今唄をうたつてゐるお小夜も育てられ、その弟も、今また一番末のお露も育てられてゐるのである。

坊やはよい兒だ、

寐んねしな――

その懐かしい搖籃の唄が、折から静まつてゐる人々の耳に、靜かに靜かに、皆を眠らせてしまはうとするかのやうに聞えて來た。皆はたゞ眠らされてしまひさうに咳一つせずじつと呼吸を凝らした。

と、その時かの女はぶるぶると身震ひをした。そしてその鷹のやうな目が今迄の鋭い色を消して、子供のやうな無邪氣な色に光った。

「お千代や！」

と、一分の間も目を放さずにゐた母は、かう聲を上げて一二歩進み寄つた。

「お千代、思ひ出したかえ？ 子供の時分の事を」

その言葉を通辯がかの女に傳へた時には、女はもう元の通りの鋭い目付にかへつてゐた。そして頑として答へた。

「わたくしは早く山に歸りたい、わたくしは蠻人だ。歸してくれない

いのなら、いつそ殺してくれ！」

見てゐる人々は再び口々に騒ぎ始めた。

「殺してしまへ！」とその中から言ふ者があつた。

「山へ逃してやれ！」と他の者が叫んだ。

「殴り殺せ、いつまでも女一疋に威張らせておくな！」

と別の者が怒鳴つた。中には石を一つ女の方に向つて投げた者さへあつた。

ところが、餘りの騒々しさに、その時家の中で折角眠りかけてゐたお露が目を醒した、そして物に驚いたやうに泣出した。

お小夜が色々にすかしてゐる様子であつたが、どうしても泣き止まないで、却て大聲で泣き立てるのであつた。

そこで仕方なく母は家の中へ入つて行つた。もう殆どあのお千代に違ひない女蠻人を、我が子にかへす事はあきらめてゐたけれども、しか

し涙は止まなかつた。そして泣きながらむづかるお露をあやしつゝ、静かに搖籃を揺つた。そして母は泣きながら知らず識らず搖籃の唄をうたつた。

ねんねをする兒はよい兒だよ――

戸外では折からかの女を圍んで見てゐる人々は、三たび言葉もなく静まりかへつてゐた。その中をかの母のやさしい搖籃の唄が聞えて來た。その静かな、聞く人の腸に喰ひ込むやうな唄の聲に、人々は身震ひしつゝ耳を傾けた。

同じやうに、かの蠻人の女はその唄を聞いた。再び前よりは大きく身震ひをした。再び前よりはもつと優しくその目の光は變つた。そして次第に顔色が青ざめて來た。まるで今までの様子とは打つて變つて見えた。それはもう荒々しい蠻人の女ではなく、確に十八のかはらしい内地の娘になつた。

忽ち、かの女はくづれるやうに跪いた。そしてその優しくなつた目が濕うたと見る間に、大粒の涙がはら／＼とこぼれて來た。そして目の前の大地に痛々しく泣きくづれた。激しく泣きながら、かの女は早口に何事かしやべつた。

それを聞いて、先づ通辯がいたく感動したやうに見えた。皆のものはたゞ電氣に打たれやうに言葉もなく立つてゐた。

聞えるのは、たゞ家の中から洩れてくるかの母の物悲しさうな搖籃の唄だけであつた。

かの女は泣きながら何といつたか？ 通辯がそれを黙つて立つてゐる一同の者に傳へた――

「あの唄をわたしは覚えてゐる。あの唄をわたしは忘れない。あの唄をわたしは聞いた事がある。何處で聞いたのか、何時聞いたのか分らない。ひよつとすると生れぬ前に聞いたのかも知れない……。」

こゝでかの女は言葉を切つて激しく歔歔なげなげつてゐたが、忽ちものに打たれたやうに顔を上げて、聲高く言つた――

「あゝ、あれはわたしのお母さんの聲だ、あれはわたしのお母さんの唄に違ひない。あの唄をうたつてゐる人こそわたしのお母さんだ！ お母さんの聲だ、お母さんの唄だ。あの唄を聞いてゐると色々なことがぼんやりと思ひ出されて来る。色々な事が……あゝ、その中にはこの三本の櫛の木も浮んで来る……あゝ、この家の中からあの唄が聞える。これはわたしの家だ。あゝ、あれはわたしのお母さんだ……」

かう言つて、十五年前に攫はれて行つて蠻人になつたお千代は泣いたのである。（現代童話選集）

一四 元朝

室 生 犀 星



室 生 犀 星

幼少の折に元日の朝早く庭へ出て見て、静かな天地の風物を眺めたときに、不思議な或新しさを感じた。庭にしても樹にしても、妙に奥まつたところに静まつて畏まつてゐるやうなところがあつた。川に近い住ひであつたためか、その流にさへ或清い思が潜んでゐるやうに思はれた。それゆゑ私は雪を手に擱んで舐めて見たことがある。何かしら變つたところがありさうな氣がしたからである。

庭に古い珊瑚樹が一本あつた。毎年の冬に私はきまつて其の春の用意をした芽を、尺餘も積つた雪を踏み込んで捲りに行つたものである。其の青いかぐはしげな芽は茜色の皮に包まれ、柔い芽立ちのからだを

縮めながらすくんで居た。

「寒いのか知ら——」。

さう何時も私は心に感じた。——それから冬構をした牡丹にも、芽が何時の間にか用意されてあつた。私がその雪を掻除けてゐると、隣の子供が屋根の雪でわづかしか見えない二階の窓から、何か聲をかけたことを覚えてゐる。——その黒ずんだ冬の子供らしい顔が非常に遠いところに、かうして書いてゐる私の目に映つてくるのである。頭の黒さばかりが見えるやうな顔である。

「芽を採りに行かうか。」

隣の子は庭がなかつたので、私の家の庭へ遊びに下りる時には、いつもさう最初に断らなければならなかつた。又さういふ時には、私はきまつて憂鬱な、どちらかと云へば優越してゐる氣持で、冷淡にたゞ「來い。」と言つてうなづくだけだつた。それでも隣の子はすぐ下りて來るのだ

つた。

私たちは何故「芽を採りに行かうか。」と言ふのか、それは冬の間に樹の芽や、芽らしい青いものを採ることが、大變楽しく物新しく季節外れの喜が味へたからである。十二月初旬から四月へかけての冬籠りは、何と言つても「芽らしい」ものに餓えてゐたのである。秋の蟲籠に草あやめを入れてやらないと、其の蟲は次第に瘠せほそるやうに、幼少な私たちにもその必要があつたからである。——氷りついた葱や、凍てた寒菊の蕾などをわづか八百屋の店頭に見過しても、心と頭腦とに或新鮮な爽快さを感じた。誰が寒菊の蕾を食べたと言つて信じてくれるものか。——隣の子は下りて來るときまつて珊瑚樹の芽をむしつて、それを雪の上にならべて遊ぶのだつた。それは小さい筍のやうな恰好で、濫い皮膚の色をしてゐた。

「寒い。」

さういふと私たちは厠の出ばつた角へ、羽織を脱いで風を防ぐやうにし、雪構をした藁の所へ食ひついて縮かまつて居るのだつた。わづか羽織一枚のお蔭で、私たちは時ならぬ四月の温かさを其の雪の上に感じた。わけても美しい芽を弄ぶ指さきを時々内ぶところの温い所にさしつけ、それを温めながらゐたのである。さういふ事が永く頭に残つて映つてゐる。

其の子は雪のとけたころに、家の人と一緒に北海道へ往つてしまつたが、船中で老婆と一緒に亡くなつたとも聞いてゐる。——毎年正月になると、私はその隣の子をゆくりなく思ひ出すのである。(高麗の花)

島木赤彦
本名久保田
俊彦

歌人
長野縣上諏訪町生
大正十五年
歿
年五十一

一五 一月一日

島木赤彦

一月一日夜のひき明けに

山の圍爐裏で豆がらを焚く。



島木赤彦

豆がはじけて柱にあたる。
あたる柱が大黒柱。

大黒柱に注連繩張つて
焚火燃えたつ注連繩動く。

動く注連繩朝日がさして

一五 一月一日

雲が輝く庭から谷へ。

谷は七谷八谷の下に

村の學校の祝がござる。

一里山道半里は野道

太郎急いで學校へまゐる。

行くよ下るよ、足早太郎

熊といはれて大力太郎。

(赤彦童謡集) 押韻法

連鎖法、對句法、重句法、

素樸、法守待情、

柿右衛門

酒井田氏

有田焼で赤

い錦手の色

を出すこと

を發明した

名人

江戸時代の

初期の人

吉田絃二郎

本名は源次

郎

文學者

早稻田大學

講師

明治十九年

佐賀縣生

南畫

支那畫の一

派

北畫に對す

我が國で文

人畫といふ

のもほゞ同

じ

近世では與

謝蕪村渡邊



一六 名工柿右衛門の村を訪ふ 吉田絃二郎

長崎線の有田驛に下りたのは朝の九時過ぎでありました。そゝり立

つた岩山と岩山の懷につゝまれたやうな古

い町は、まだ岩山のために日光を遮られてゐ

るので、何となしに濕っぽい空氣が低い軒の

あたりには漂つてゐるやうな感じがしました。

迫つた山と山との間を縫つて狭い川が谿を

なして流れてゐます。川床が細かな白い砂であるためかして、一つ一

つの小石でも數へられるほど水は澄んでゐました。黒い岩山の上に

は、赤松が恰も繪のやうな恰好に蠢々と繁つてゐました。

この町を取りかこんでゐる黝ずんだ岩山や松や流れの具合は、どう見

ても南畫式だと思ひます。京都附近のあの美しい曲線を描いた女性

一六 名工柿右衛門の村を訪ふ

華山などが
その大家

光琳風

尾形光琳を

祖とする

多く金銀を

用ひて山水

花鳥人物な

どを描く優

美な畫風

香蘭社

有田焼の輪

出品を重に

製造する會

社の工場

的な山の形が光琳風なのに對して、この附近の山や水はいかにも簡勁な墨繪を聯想させます。私は有田町の香蘭社に行つて花瓶などを購つてから、香蘭社の人に柿右衛門の家を訊ねました。

「有田町の南の町外れから左に行けば、大村長崎道になりますから、そつちに曲らないやうに、どこへまでも眞直において下さい。南川原と云ふ山の中のごく小仕掛の家です。」といつて教へてくれた香蘭社の人、の言葉を思ひ出しながら、私は有田の町を南の方へ下つて行きました。

私はまだ中學時代に、この町に一度泊つたことがあつたので、その時泊つた古風な旅籠屋を想ひ出しながら、それらしい家を見て歩きました。が、たうとう探し出すことはできませんでした。ちよつと寂しいやうな氣もしました。

黒い岩山の懷には段々畑があつて、畑の周圍には櫨紅葉や柿の葉が紅

く燃えてゐました。ゆるい勾配の丘には古い墓地があつて、そこは大抵白い山茶花が咲いてゐました。町はづれの掛茶屋に腰を卸して南川原へ行く道をたづねました。

丁度收穫の時ですから、店の前には稻こき器械を買つて荷車に積んで行く夫婦の若い百姓が憩うてゐたりしました。日はかん／＼とまるで夏のやうに烈しく道に照りかへしてゐました。陶土が白く道の面を埋めてゐますので、ともすれば眩しくてたまらないやうなこともありました。

道は右手に岩山の黒髮山を眺めて、西ヶ岳だの國見峠だのいふ高い樹の繁つた山の下を伊萬里の方へ坦々として走つてゐるのでした。どの田にもどの田にも若い男や女たちが稻をこいたり、連枷で稻を打つたりしてゐました。空はどこまでも秋らしく澄んでゐました。

私はこの道を小學時代に七八人の友人と夜つびで伊萬里まで歩いて

伊萬里
有田の北五
里の海岸

行つたことがあります。其の時は霧が一面に山も川の面もつゝんでゐました。二十三夜ごろの月が光を投げてゐたこともまだ記憶してゐます。黒髪山を右に見ながら、私は西の方へ白い道を歩いて行きました。黒く繁つた山の腰には紅葉がちらほらと見えました。

私は、柿右衛門が錦彩の色を工夫しながら、秋になればこのあたりの山の色や柿の色をつくゞと感に打たれて眺めてゐたであらう。などと想ひながら、美しい白い流れに沿うた道を歩いて行きました。

黒髪山には傳説がのこつてゐます。昔、鎮西八郎がこの附近の豪族の邸に身を寄せてゐた頃、黒髪山の太蛇を射殺したといふことです。その傳説を語つてくれた先生は黒髪山の麓の人でありましたが、先生はその後ハルビンの方へいつて居られるといふことを、去年小學校時代の友人たちと始めてクラス會を東京で開いたとき聞きました。

私はその先生のことなどを思ひ浮べながら、埃の多い道を歩いてゐる

ハルビン
Kharbin

間に、鐵道線路を踏切つて、なほ伊萬里の方へずん／＼歩いてゐました。私は五六歩先に歩いてゐる籠をかついだ女に南川原への道をたづねました。

私は南川原へ行く道を既に可なり遠く通り過ぎてしまつてゐたのでした。

再び鐵道線路まで立ち歸つて、それから南の方へ小さな山道にはいると、そこに古い石の道標があつて、それには南川原道といふ文字がおぼろげに讀まれるのでした。

道は緩勾配をなして低い小山と小山との間を登つて行くのでした。こゝにも美しい小川がせゝらぎの音をなして流れてゐました。小川に沿うて草葺の小舎があつて、そこには水車ではないが、小川の水を受けて陶土を搗く仕掛がしてあるのでした。ざあつと水が落ちるたん

びに、どしんと小春日和の長閑な感じを喚び起すやうな杵の音が聞えて來るのでした。私はちよつと伊豆の修善寺ありの山里を聯想しました。恐らく柿右衛門が使つた陶土もこの小川の水で搗かれたのでせう。またこの小川のふちに彼は幾度か呆然として立ちすくんでゐたこともあつたでせう。

どこも畑や家のまはりには丁度赤く熟した柿の實がたわゝになつてゐました。柿右衛門だの澁右衛門だのといふ名が出て來たのも、きはめて自然なことのやうに思はれます。

北
大抵は農家だと思つて

極めて平凡な小山につゝまれた極めて平和な感じを抱かせらるゝ山里が、名工柿右衛門の南川原といふ村です。

赤い柿の實につゝまれた秋の村には、二十戸か三十戸ぐらゐるの古びた家が爪先上りの道に沿うて一かたまりになつて集つてゐます。家々の前には美しい小川が溝ぐらゐの大きさになつて流れてゐます。大

抵は農家だと思つて稲などが土間にも庭にも一面に干してありました。柿の他には或古い家の庭に美しい石榴が塀の外に枝を垂れてゐるのを見ました。

大抵は同じ家から出たものか、同じ姓の家が幾軒もくゞ並んでゐました。

「柿右衛門の家は……。」と、私は乳を飲ませてゐた百姓のおかみさんに訊ねました。

「柿右衛門さんの家ですか。」と言つて、若い女は山の上を指して見せました。

この山里の村の一番高地にある家が柿右衛門の屋敷でした。黒い垣根があつたり、硝子窓の長い、新しい建物が鏝形に並んでゐたりしてゐるのは、ちよつと小學校といふ感じを與へました。

門の突きあたりには昔風の随分大きな構の家がありました。「私はそ

こにはいつて行つて、主婦らしい三十ばかりの女の人に名刺を出して來意を告げました。廣い土間一面に皿だの鉢だの白い土のまゝの磁器が列べられてゐました。大きな柱も天井も餘程古い時代に建てられたまゝだと見えて黒く煤けてゐました。

若い女は子供を抱いたまゝ、私の名刺を握つて門の外に走つて行きました。

私は其の間庭に出てあたりを見ました。表座敷の右手寄りには倉があつて、倉の前には一本の柿があります。小春日和の日光を浴びた柿の木には、枝も垂れるくらゐに赤い柿の實がなつてゐました。私は後に聞いたのでしたが、それが柿右衛門と最もゆかりの深い柿の木であつたのでした。柿の木の傍には碑がありました。それには柿右衛門が元和三年豊公の臣高原五郎七に京焼の方法を傳授せられたこと、京

竹園と云ふ
寺あり、石河、
竹園寺と云ふ
柿右衛門の
墓あり

焼の質の脆弱なのを不満に思つて色々な工夫をしたこと、正保三年苦心の後錦彩磁器を發明したことなどが記されてありました。

蛇が多いと見えて碑の下に黒い蛇がのたくつてゐました。碑の前には口を裂かれたまゝの蛇が一匹死んでゐました。間もなく品のよい若い男が見えましたが、折角お出で下されましたが、主人が他出中で、何分くはしいことは私には分りませんが、と言つて工場の方へ案内してくれました。なるほど廣い仕事場のなかはがらんとして、たゞ二三人の男が白い土を捏ねたり、土を入れた水甕を掻きまはしたりしてゐるだけでした。疊を敷いた隅の部屋では、二三人の女が筆を握つて繪を書いてゐました。そのすぐ傍では蒼い顔色の男が轆轤をまはして壺のやうなものを拵へてゐました。

「あの柿の木の下でお考へになつたさうです、幾年も幾年も。柿の木

さへ時が来ればあのやうに色づくのに、どうして人間の力で焼物に赤い色が附けられないだらうかと、そのことばかりお考へになりましたさうで、と言つて、若い男は仕事場の窓から表座敷の前の柿の木を指さして見せました。

赤く熟した柿の木の實の下に終日黙々としてゐた名匠の俵を、私は描いて見ました。私の心には、神の力に對して人間の力を試みようとしたレオナルド・ダ・ヴィンチのことが想ひ出されました。

赤い實のなつて居る柿の木の下には、小犬がけだるさうに秋の陽を浴びて眠つてゐました。

私は小さな盃を手にとつて見ました。燃えるやうな朱の色が美しく白い盃の底に輝いてゐました。私は庭の土竈と柿の實とを見比べました。私は土竈を開いて、呆然として涙ぐみながら佇んで居た柿右衛門の姿を想像しました。次の刹那に私は一枚の磁器を抱へて狂喜し

ミラノ
Leonardo da Vinci
(1452-1519)
伊太利の天才
画家
彫刻家
建築家
ダ・ヴィンチ
レオナルド、
モナリザ
モナリザ
モナリザ
マドンナ

つゝ、廣い庭のなかを飛びまはつた柿右衛門の姿を想像しました。その折のかれの喜の聲がそこいらの建物の間にまで響いてゐるやうにさへ思はれるのでした。

盃の底に描かれた小さな花の朱の色を見つめてゐる間に、私は涙ぐましいやうな敬虔な心にならずには居られませんでした。

隠れたる山里に苦しみ悩んでゐた恩惠者。それはたゞ一條の朱の色を磁器の面に刻みつけるだけの發明であつた。しかしそれはいかに多くの苦惱を値した仕事でありました。かれは少くとも私たちの世界に美の要素を一つ多く殖してくれたのでした。

人間の世界の美、人間の世界の幸福はいつでもこのやうな隠れた苦惱者によつて與へられるといふことを、私は尊い心を抱いて考へずには居れませんでした。

柿右衛門が實際に住んでゐた家は、現在の家の裏でやゝ上手の丘の上

にあつたといふことでした。今では木が一面に繁つてゐます。その頃は、今の座敷の例の柿の木と松の木との間に土竈があつたといふこととです。松もやはり當時からあつたのださうですが、可なり大きな松です。

その松の下では鑄掛屋がしきりと鑄掛けをしてゐました。奥の座敷で茶でも飲んで行つてくれるやうにとしきりに勧められました。何分汽車の時間が氣がかりになつて仕方がなかつたものですから、茶も飲まないで歸ることにしました。柿右衛門の遺物でもあつたら見せて貰はうと思つてゐましたが、時間がないのでそれも果さず歸路につきました。

柿右衛門の墓は上の山と下の山にあるさうですが、初代の柿右衛門の墓は下の山にあるといふことを聞きましたので、山を下ることにしました。門を出る時、例の柿の葉があんまり美しく紅葉してゐましたの

で、せめて一枚の葉でもと思つて所望しましたら、家の人は大きな柿の實が二つ附いた枝を手折つてくれました。

門を出てから私は再び同じ道を下つて、蕎麥畑の間を通りながら、村の小娘や畑の中に働いてゐる男たちにたづねて見ましたが、柿右衛門の墓は見當りませんでした。

振りかへつて見ると、北も南もゆるやかな傾斜の秋の小山につままれた南川原は、ほんたうに平和な感じをあたへました。東には高い木の繁つた山が聳えてゐまして、西の一方だけが開いて、そこからは遙かに伊萬里の背後の山が青く煙つてゐるのが見えました。

そこには富豪らしい大きな邸もなく、また貧家らしい小さな家も見えません。どれもこれも同じくらゐの大きさの農家が平和な谿の懷に黄金のやうな柿の實につつまれて怠惰な日向ぼつこをしてゐるやう

に思はれました。

學校から歸つて行く子供たちの顔は大抵整つた正しい輪廓を持つてゐました。

エエエエ生かす平れナソソノ 柵地を此

松平入國
吹流勸佛川
生かす身ヲ六邊

ニハテ天上下
地獄ヲ一和泉
生かす身ヲ六邊
成佛也下拉瓦七條
一七廿五陸

私は丘の上の墓場の上つて行きました。そこには御堂があつて、胸に茜木綿の涎掛を掛けた地藏尊の像が一基立つてゐました。隣の堂には葬の折に村の人たちが使ふ輿がしまつてありました。

私はしばらくその堂のまはりを探して歩きましたが、酒井田柿右衛門の墓らしい墓はたうとう見出しませんでした。小さな龜のやうな形の墓があつて、その墓の上や、周圍には眞白な陶土の粉が振りかけられてありましたが、或はそれが名工の墓であつたかも知れません。

ともかく汽車の時間が切迫して來たので、私はそこへにして墓地の横から粟畑に出ました。そしてそこに粟を刈つてゐる老人に、今一度柿右衛門の墓を訊ねて見ましたが、柿右衛門さんのお墓は下の山にあ

ります。と言ひました。私はつひに名工の墓を見ずに歸つて來ました。伊萬里街道に出てから、私は南川原の東の方に聳えてゐる美しい山の名を學校歸り、子供に訊ねて見ました。

「あの山はなんごらんやま」といふやうに聞えましたので、「どう書くの」と訊ねましたが、少年は羞恥みながら笑つて駈けて行つてしまひました。(麥の丘)

武者小路實篤

文學者
思想家
明治十八年
東京生

一七 花 咲 爺

武者小路實篤

(正兵衛日當りのよい處に蓆を敷いて草鞋を作つてゐる。隣村の中兵衛登場)

中 お爺さん相變らずおせいが出ますね。

一七 花 咲 爺

正 なに、少し足を痛めたので野らに行けないから、草鞋を作つてゐま
す。



武者小路實篤

中 お前さんの處の犬は殺されたさうです
ね。

正 餘り大きい聲を出さないで下さい。聞
えるといけませんから。

中 お前さんはそれで惣兵衛さんには何にも言はずに泣寝入をなさ
つたさうですね。

正 それでも怒つても始まりませんからね。怒つて犬が蘇つてくれる
なら怒りもしたてせうがね。

中 だけど黙つてゐるのは馬鹿げてゐるぢやありませんか。皆、お前
さんが惣兵衛さんを怖がつてゐるから、惣兵衛さんがいゝ氣になる
のだと言つてゐましたよ。

正 それでも怒つても始まりませんよ。私も若い中は怒りつぽい人間
でしたが、この頃になつて怒るといふ事はよくない事だと氣が付き
ましたよ。怒つてろくな事はありませんからね。

中 しかし私は話を聞いただけでも腹が立ちましたよ。

正 それはまだお若いからです。私が怒れば惣兵衛さんを怒らす許
ですよ。隣同士怒り合つてゐるのは面白くありませんからね。

中 それはさうですが、よく怒らないでゐられますね。犬はどうしま
した。

正 あの木の下に埋めてやりましたよ。

中 さうですか。本當にいゝ犬でしたかね。あんな犬は二度と見つ
かりませんね。

正 さうですよ。しかし仕方ありませんよ。婆さんを喪つた時も、
取返しがつかない苦みは十分味ひましたよ。この世に居る間は、ど

んな事が起るかわかりません。出来てしまつた事はそれまでとして、又新しい事を始めて見るより外に、仕方がありませんね。私は今はあの木の大きくなるのを待つてゐます。

中 随分氣の長い話ですね。

正 經つて見ればぢぎですよ。それ迄に死ねばそれ迄ですがね。

中 隣の惣兵衛さんに對して、貴方は本當に腹が立ちませんでしたか。
正 腹が立つよりは犬が氣の毒でした。殺される時どんな氣がしたらう。私が助けに来て欲しいとどんなに思つたらう、その時行つてやればどんなに喜んだらうと思ふと、氣の毒な氣がしますよ。しかしどうも仕方がありません。私は生きてゐる間、何かこの世にお役に立つ事をしたと思ひます。思つても始らない事を、思つてばかりゐても始まりませんからね。

中 貴方はどうしてそんな氣になれるてせう。

正 年の功ですよ。

中 隣の惣兵衛さんだつて随分いゝ年をしてゐるぢやありませんか。

正 私と同じ年ですよ。あの人は苦勞が足りませんから。それに生れつきも手傳つてゐるのですね。あの人は昔から負嫌ひですから。

中 負嫌ひと言ふより、あんな人は慾ばかりの我利々々と言ふ方が本當でせう。

正 人の事ばかり言ふものぢやありませんよ。自分さへ慎んでゐればいゝのですよ。人の事はかまつてゐられません。

中 貴方は随分お隣にひどい目に逢はされて來たてせうね。それなのによく懲りずに又犬をお貸しになりましたね。ひどい目に逢ふ事はわかつてゐたのでせう。

正 まあ、半分わかつてゐましたが、殺されると迄は思ひませんでしたよ。

中 貴方はあんまり人を信用なさるから、いけないのですよ。もう懲りてもいゝ時分ぢやありませんか。

正 しかしそれが私の病氣なのです。自惚が強すぎるかも知れませんが、つい自分の方で悪い事をしないと、いふ自惚があると人を信用したくなるものですから。徳が足りなくせに自分の徳に自惚れるのがよくないのです。しかし是も修業ですよ。お蔭で少しづつ、修業を積んで行きますよ。

中 貴方が餘り怒らないので、慾兵衛さんは村の同情が貴方にばかり集ると言つて、貴方の事を偽善者だと言つてゐますよ。

正 さう思はれてゐる間は思はれてゐるより仕方がありませんよ。併しさう思はれても私は別に損はしないで済みますよ。只さう思ふ事で年中私に心を許す事が出来ず、私を憎まなければならぬのは、慾兵衛さんの損ですが、それも仕方がありません。だから、私は慾

兵衛さんより貧乏ですが、慾兵衛さんより暢氣に暮してゐます。いろ／＼の楽しい事を考へる事が出来ますからね。何でも心の持ちやうだと言ひますが、私も年をとつてから始めてそれが本當にわかりましたよ。うまい事があつても油断は出来ませんし、悲しい事があつても參つてはゐられません。

中 一寸見てゐない中にあの木は大きくなつたやうですね。

正 あの木は不思議な木ですよ。私がいゝ心持を持つとあの木が大きくなります。あの木は私の心を吸つて生きてゐるやうな氣がします。少しでも考へてはいけない事を考へると、あの木は萎れてしまひます。

中 本當に不思議な木ですね。

正 不思議な木です。併し私にとつてはいゝ木です。恐しい木です。私はあの木を見て自分の心掛を直してゐるのです。慾兵衛さんに

不快を持つとあの木は喜びませんよ。私はあの木が大きくなつたら、臼を作らうと思つてゐます。それで餅を搗いて皆さんに御馳走したいと思つてゐます。その時は貴方も来て下さい。

(木めきくと大きくなる)

中 あつ、木が大きくなりましたね。

え、皆に御馳走しようと思ふと、この木は喜びのです。

中 不思議な木ですね。

二

中 たうとう臼が出来ましたね。

正 出来ました。これから餅を搗く處です。

中 手傳ひませうか。

正 有り難う。それなら手傳つて貰ひませう。私が疲れたら代つて

下さい。

中 え、何時でも代ります。

(正兵衛餅を搗出す。中兵衛隣で見て居る。暫くすると急に餅が寶物に變る。二人は驚く)

中 どうしたのです。どうしたのです。

正 (手に取つて見) 餅が寶物に變りました。

中 えつ、寶物に變りましたか。どうしたのでせう。

正 私にもわかりません。併し誰か、私の心に感じて、餅を寶物にし

てくれたのでせう。私にもわかりませんが。

中 不思議な事もあればあるものですね。もつと餅を持つて来て搗

いて御覽なさい。

正 私はもう怖くなりました。もうこの臼に觸るのが怖くなりました。

中 た。今度搗いて見たら餅がどうなるか私にはわかりませんから。

(慾兵衛入つて来る)

愨 正兵衛さん立派な白が出来ましたね。

正 やつと作りましょ。

愨 澤山の寶物がはいつてゐますね。どうしたのです。

正 今餅を搗いたら、それがなくなつて、何處からかこんなものがわき出たのです。

愨 えつ、餅を搗いたら餅が寶物になつたのですか。

中 まあ、さうです。

正 私にこの白を貸してくれませんか。

中 愨兵衛さん、正兵衛さんはこれからまだ澤山餅を搗かなければならないのですよ。

愨 正兵衛さん、貴方は急ぐのですか。

正 いゝえ、別に急ぎません。

愨 それならこれを貸して下さい。すぐお返しします。私は少し急

ぎますから。

中 愨兵衛さん、それはあんまり蟲がよすぎますよ。

愨 何が蟲がいゝのです。いらぬものを貸してくれと言ふのが蟲がいゝのですか。

中 貴方は、又餅を搗いて寶物に變へようと思ふのでせう。併しそれはよした方がいゝかも知れませんか。心の持方一つですから。

愨 寶物がほしくて貸してくれと言ふのぢやありませんよ。只こなひだから餅を搗きたいと思つてゐたのです。

中 貴方は白を持つていらつしやらないのですか。

愨 持つてはゐますが、あんまり古くなつたので、工合が悪くなつて搗きにくいのですよ。正兵衛さん借りて行つていゝてせう。

正 どうか。しかしこの白は心の持方一つで黄金の代りに穢い物が出る事もありますから、用心なさつて下さい。

愆 私はそんな心に心の下等なものに見えますかね。正兵衛さんに比べるとそれは誰でも皆下等でせうがね。それなら拜借して行きませよ。

正 どうか。(寶物を取除き) それなら白を二人で持つて行きませう。

愆 よろしい。一人で擔いで行きますから。

正 杵もお貸しませうか。

愆 それは私の家にもあります。それならすぐ後でお返しします。

(白に繩をかけ) やつこらさ。

(愆兵衛白を背負つて退場)

正 随分愆兵衛さんは力がありますね。

中 愆の力ですよ。ですけど、貴方はよくあんな大事な品を平氣でお貸しになりますね。

正 白は死ぬ事はありませんからね。併しうまく寶物が出ればい、と思ひますがね。この前の犬の時のやうに、何も出なかつたら、愆兵衛さんは嘸立腹なさるだらうと、それが氣になりますよ。私だから寶物が出ると言ふと少し傲慢に聞えるかも知れませんがね。誰でもあの白で餅を搗くと餅がおのづと寶物になると定まつてはゐないやうに思ひますから。誰でもお米をいたゞけば善人になるとは限りませんからね。私はあの木を心から愛してゐましたから、木の方でも私にてなければ見せないものを持つてゐるやうな氣がします。餘り大きな事は言へませんがね。今時分、餅がどん／＼寶物に變つてゐるかも知れませんがね。愆兵衛さんはふだんの心掛といふ事をまるで考へてゐませんから、少し心配です。

中 私は愆兵衛の餅が寶物に變つてくれなければい、と思ひますよ。
正 そんな心はなるべく持たないやうにする方が宜しいよ。さういふ心のある間は、大事な事に目がつかなくなりませよ。他人を呪ふ

やうな事はなるべくしない方が宜しいよ。

中 併しあんまり慾の深いものに罰が當らないのは氣持の悪いもの
ですからね。今にひどい目に逢ふといふと思ひますよ。私はまだ
若いせるか、慾ばり者はひどい目に逢ふ方が氣持が宜しい。何だか
餅を搗いてゐる音がしますね。一寸見て來ませう。

(二人耳を澄ませる)

正 もうぢき返しに來ますよ。呪ひながら見るのはよくありません
よ。

中 何だか大きい音がしましたね。白を倒したやうです。何か怒
つてゐるやうですよ。(間) 何か割つてゐるやうですよ。若しかし
たら。

正 大丈夫ですよ。さう人を疑ふものではありませんよ。
中 貴方はよくさう平氣でゐられますね。

正 私は心を出來るだけよくするやうにしてゐます。さうすれば、何
かゝ悪い目に逢はさないやうに私を守つてくれるやうな氣がしま
すよ。私は自分の心以外の事はなるやうにさせておきます。

中 私は氣になりますから見て來ます。

正 さうですか。併し慾兵衛さんがどんな事をしてゐても、貴方は怒
つてはいけませんよ。私の事を思つて下さるなら。

中 大丈夫です。慾兵衛さんと喧嘩しても始まりませんからね。

(中兵衛退場。正兵衛耳を澄ませる)

三

(慾兵衛飯をたいてゐる。中兵衛登場)

中 慾兵衛さん。

慾 (怒つてゐる) 何か用かね。

中 餅はどうしました。寶物になりましたか。

愨 なるわけはないよ。また正兵衛の野郎にだまされたよ。私は人がいゝもので、すぐだまされるよ。

中 どうしたのです。餅を搗くのはやめたのですか。

愨 搗けるだけ搗いて見たさ。すると何が出たと思ひなさる。

中 何も出なかつたのですか。

愨 出たことは出たよ。正兵衛に敵を討たれたよ。あいつにまただまされたのだ。

中 何を怒つてゐるのです。正兵衛さんは何も悪い事はしないぢやありませんか。

愨 あいつは恐しい悪黨だよ。お前さんもだまされなさるなよ。餅を搗いて寶物が出るやうに見せたのは、私の餅を蛆にする策略だつたのだよ。寶物をそつと入れておいて、寶物が出た、寶物が出た、天から授つたと言つて、あれは人をだますのだよ。

中 そんな事はないでせう。私はちやんとこの目で見てゐたのですから。

愨 それはお前さんがだまされたのさ。あいつは魔法遣見たやうな奴だよ。お前さんをだます位何でもないよ。このいゝ年をした俺でさへだまされるのだからね。

中 貴方の餅は蛆になつたのですか。

愨 さうよ。人を馬鹿にしてゐるぢやないか。

中 恐しい目に逢ひましたね。

愨 逢はされたよ。そして何か苦情を言ふと、お前さんの心掛がよくないからと又お説教を聞かされるのだから堪らないよ。そして世間の奴まで俺を馬鹿にして、正兵衛ばかり賞めるのだからね。うつかり苦情も言へないよ。大事な餅を損して泣寝入さ。あいつは本當に恐しい奴だよ。

中 それで白はどうしました。

愠 白か。白は、あんまり人を馬鹿にするから毀して今焼いてゐる處ゐ。

中 白を毀したのですか。

愠 だつて毀さないわけには行かないぢやないか。いくらお人好しの私だつて黙つてゐるわけには行かないよ。

中 それだつて、黙つて毀すのはよくありませんね。あんなに正兵衛さんが丹精して作ったのぢやありませんか。

愠 その丹精は犬の敵を討つて私に恥をかゝせる爲にさ。私が白を借りに行つた時、いやな顔一つしなかつたのは、こんなたくらみがあるからだよ。後で舌でも出してゐたらうよ。

中 そんな事はありませんよ。貴方の心がひねくれすぎてゐるのですよ。

愠 何だと、もう一遍言つて見る。

中 何度でも言ひますよ。つまり貴方が愠が深すぎるからいけないのですよ。

愠 貴様は正兵衛に頼まれて、俺の悪口を言ひに來たのだな。喧嘩を賣りに來たのだな。いくら年をとつたつて貴様には負けないぞ。

中 愠兵衛さん。さう怒るものぢやありませんよ。

愠 正兵衛そつくりだ。怒るものぢやありませんよ。人を怒らしておいて、怒るものぢやありませんよもないものだ。

中 何だと。

(二人取つ組みあふ。愠兵衛抑へ附けられる。正兵衛登場)

正 貴方達は何してゐるのです。さあ喧嘩などは早くおやめなさい。

愠 正兵衛。覚えてゐる。貴様はよくもこの俺をだましたな。

正 何を言つてゐるのです、愠兵衛さん。中兵衛さん、もうおよしなさ

い。(無理に起す)

愨 正兵衛。よくもこの愨兵衛をだましたな。(正兵衛の顔を打つ)

中 (又打たうとするのを止め) 正兵衛さんを打つと承知しないぞ。正兵

衛さん、大變な事が出来ましたよ。

正 どうしたのです。

中 貴方が丹精してつくつた白は愨兵衛さんに焼かれてしまひまし
たよ。

正 焼かれた。(びつくりして、又平靜に戻る)

愨 焼いたが悪いか。人の餅を蛆にしやがつて。さあ、餅を返してく
れ。

中 愨兵衛、そんなわからない事を言ふと承知しないぞ。

正 愨兵衛さん、餅が蛆になつたのですか。それは本當ですか。

愨 しらばつくれるない。お前さんこそよく知つてゐる筈だ。

正 それはお氣の毒でしたね。しかし愨兵衛さん、私に悪氣はないと

いふ事はわかりませんか。私が愨兵衛さんの幸福を望んでゐる事
はわかりませんか。

愨 どうせお前さんはお人好して、私は悪者ですよ。さつさと歸つて
くれ。

正 この灰を少し戴いて行つて宜しいか。

愨 ほしけりや持つて行け。そしてみんなに俺のした悪い事を吹聴
するがいよ。

中 正兵衛さんは黙つてゐたつて、私は黙つてはゐない。

正 愨兵衛さん、さうあなたのやうにひがんで取るものではありません
よ。

愨 貴方の言ふ事を聞くのはもうこりぐですよ。人の餅を蛆にし
て、怒るな、ひがむな、貴方の心掛が悪いから……よく言はれたものだ。

中 何。

正 中兵衛さん、怒るものぢやありませんよ。さあ行きませう。さよなら。

怒るものぢやありませんよ。はゝゝゝ。

(中兵衛ふり返る。二人退場)

四

(二の場へ戻る。二人登場)

中 随分ひどい奴ですね。

正 併しあゝ取ればあゝ怒るのも無理はありませんね。自分が餅を蛆にしたとは思はないで、私が策略で惣兵衛さんを陥穽に陥れたと思ひ込んでゐるのですから。

(正兵衛の手から灰が落ちる。その灰がかゝる枯草は青々として来て、花が咲く。正兵衛の歩いた處に花が咲く。中兵衛ふと氣がつき)

中 正兵衛さん、正兵衛さん、不思議な事がありますよ。

正 何です。

中 こんな時候に花が咲いてゐますよ。

正 どれ、本當に咲いてゐますね。

中 貴方の歩いた處には皆咲きましたよ。

正 どうしたのでせう。

中 不思議な事があるものです。貴方の心掛がいゝから、歩く處が皆花になり、惣兵衛さんが歩く處は蛆になるのでせう。

正 わかりましたよ。きつとこの灰がかゝると、花が咲くのですよ。

ためしにこの枯木に灰を少しかけて見ませうか。

中 えゝ。

正 (かける。花が咲く) そらこの通り、花が咲きますよ。この木にも灰をかけて見ませう。(花が咲く)

中 不思議な事もあるものですね。

(沈黙)

五

大名 花咲爺と慾ばり爺を呼べ。

侍 はつ。(退場)

奥方 花咲爺は本當に花を咲かせるで御座いませうか。

大名 それは自分で見ない間は信じられない。しかし現在見た者があ
る以上は、嘘だと云ふことも出来まい。しかし不思議なのは枯木に
花を咲かせることではない。

奥方 それなら何が不思議なので御座います。

大名 それは、今時に花咲爺のやうな人間がこの世に居ると云ふことだ。
自分の大事にしてゐる犬を殺されても、少しも怒らず又恨まずに、又
白を平氣で貸すと云ふことだ。そしてその丹精した白を焼かれて

も怒らないと云ふことだ。それに、花咲爺の不斷の心がけや行を聞
けば聞く程感心な者だ。さすがに枯木に花を咲かせるだけの者だ
と思へる。わしはこの世にそんな人間があるとは思はなかつた。
花を咲かせることは珍しい。しかし花咲爺の心こそなほ美しい、な
ほ賞めなければならぬ。

奥方 本當で御座いますね。それにしても慾張爺はひどい人で御座い
ますね。

大名 ひどい奴だ。だが、わしにはそいつの心の方がわかる。しかし、そ
んな善い人のわきに居ながら、その人を信じる事が出来ないで、常
に疑ひ憎むと云ふのは又珍しい男だ。花咲爺に花が咲かせられ、
ば、自分にも花を咲かせる事が出来ると、性も懲りもなく思つてゐ
る。同じ灰さへ持てば同じ事が出来ると思つてゐる。灰を生か
すのは花咲爺の不斷の心がけだ。又其處が貴いのだ。

奥方 あなたはその慾張爺もお呼びになつて、こゝで花を咲かせて見ようとおつしやるのですか。

大名 さうだ。俺は同じ灰がちがふ人間によつてどんな働をするか、この目で見たいのだ。

奥方 慾張爺に花が咲かせられるでございませうか。

大名 誰も見たものはない。けれど咲かない處も見たことはない。しかし世間の噂が本當なら花は咲くまい。灰は蛆か何かにかはらなければならぬ。

奥方 蛆にかはられてはたまりませんね。

大名 しかし何か並の人とはかはつたことをするだらう。善意を悪意にとり、恩を仇に思ひ、善人を偽善者にし、強情我慢を通す奴だから。

(花咲爺と慾張爺同じやうな姿をし、同じ筈に灰を入れて持ち、登場。大名の前に畏まる)

大名 正兵衛、慾兵衛、今日は御苦勞である。

兩人 はつ。

大名 誰か、正兵衛と慾兵衛の灰をまぜてやれ。正兵衛の持つてゐる灰を半分慾兵衛のに入れ、慾兵衛のを半分正兵衛のに入れて、よくまぜてやれ。

侍 はつ。

(侍、言はれた通りにする)

大名 正兵衛、それならお前から先に、あの木の東に出てゐる枝に花を咲かせてやれ。

正 畏まりました。出来るだけやつて御覽に入れます。しかし私の力では御座いけませんから、仕損じましても御宥し下さい。

(枯木に梯子が懸けてある。正兵衛それに乗る、何か念じながら灰をまく。花が咲く)

大名 (立ち上り) でかした、花咲爺。今日からお前は世間の云ふ通り花咲爺と名乗るが、いゝ、でかした、でかした。

正 (下りて畏まり) 恐れ入ります。

大名 お前が花を咲かせたのを見ても、お前の不斷の心がけがわかるやうに思はれて、わしも嬉しく思ふぞ。用意の寶物を持つて來て、花咲爺に與へよ。

侍 はつ。

大名 どうだ皆の者、心を美しくもてばいつか知れずには居らないものだ。それにしてもよくお前は長い間辛抱したな。わしはそのことを、花が咲いたより嬉しく思ふぞ。自分が花を咲かせたやうに後の世にまで語り傳へて威張りたい氣さへする。

(侍、寶物を正兵衛の前におく。慾兵衛横目でじろく見て居る)

大名 花咲爺。花を咲かせた褒美ぢや、僅かだが收めてくれ。

正 過分に存じますが、御言葉に背くのも恐れ入りますから、有りがたく頂戴致します。(御辭儀をし、以前の位置にさがる)

大名 さて慾兵衛。その方も、花を咲かせて見よ。花咲爺にやつた寶物より、もつと價の高い寶物をやるぞ。

慾 この灰に正兵衛の呪の息がかゝつて居りませんければ、きつと咲かせてお目にかけます。

大名 お前はまだ正兵衛を恨んでゐるな。

慾 花が咲けば、この恨もなくなるで御座いませう。それ迄は恨まないわけにはいきません。私は正直者です。腹に思つたことは何處でも云はないではゐられません。

大名 それは感心な心がけだ。花を咲かせよ。

慾 咲かせてお目にかけます。褒美は必ず下さるで御座いませうね。

大名 花さへ咲かせたら必ずやる。

慾 正兵衛さんのよりもつといゝのを下さいますね。

大名 もつといゝのをやる。花を咲かせたら。

愨 (獨白のやうに) そんな事が出来ないで。俺でも人間だ。

(愨兵衛同じ恰好して梯子にのり、無造作に灰をまく。花が咲かない。皆笑ひ出す。しきりにまく。いらだつて残らずまく。灰が正兵衛をぬかして皆の目や口に入る。到頭殿様の目に入る。耐へて居た殿様、烈火のやうに憤り、立上る)

大名 もう灰をまくのはよせ。誰か早く愨兵衛をとりおさへよ。聞きしにまさりしひどい奴だ。早速愨兵衛の首をはねよ。

(侍、愨兵衛をおさへつける)

愨 どうぞお助け下さい。お助け下さい。

大名 いや、わしは腹に思つたことはお前のやうに行はないわけにはいかない。お前が犬を殺したやうに、わしはお前を殺さなければならぬ。

愨 お助け下さい。お助け下さい。命ばかりはお助け下さい。

大名 いや、わしは助けることは出来ない。すぐ愨兵衛をつれて行

つて首を刎ねよ。

侍 はつ。

正 一寸お待ち下さい。

大名 なんだ。

正 どうか、愨兵衛さんの命はお助け下さい。お言葉に背いて失禮では御座いますが、お殺しになるのはお宥して下さい。

大名 お前は、愨兵衛の殺されるのを氣持よく思はないか。

正 思ひません。愨兵衛さんは腹の底からわるい方ではございません。あの姿を見たら、誰でも同情しない方はない筈だと存じます。どうかお殺しになるだけはお宥して下さい。

大名 お前にやつた寶物をのこらず返せば、愨兵衛の命はゆるしてやる。どうぢやな。

正 お返しします。お返しします。

大名 惣兵衛、正兵衛に禮を云へ。

惣 それが正兵衛の策略だ。誰が禮を云ふものか。

大名 それなら貴様は首がはねてもらひたいのか。禮を云ふのがいやなら、首をはねるぞ。

惣 (怒つたやうに) 正兵衛さん、有りがたう。御蔭で、お前さんは寶物を

失つたね。

大名 そいつを連れて行け。

侍 はつ。(侍、惣兵衛をつれてゆく。沈黙)

大名 花咲爺。わしはお前が花を咲かせたよりも、寶物をかへしてまでも、惣兵衛の命を助けようとした心を嬉しく思ふぞ。誰か、もつと寶物を持つて來てやれ。

侍 はつ。(侍間もなく以前にまさる寶物を持つてくる)

大名 花咲爺。わしはお前のやうな人間をこの目で見、この心で感じる

ことが出來たのが嬉しいのだ。この寶はお前の心に任せる。

正 はつ。(平伏する。涙ぐむ)

(沈黙)

幕 (童話劇三篇)

一八 佐久良東雄

我が國の花にはうるはしいのが澤山あるが、中にも花の中の花として世の人にもてはやされるのは、何といつてもやはり櫻の花である。その櫻の花を愛して、自分の苗字にした人がある。それは佐久良東雄といふ今から六十餘年前に國事に斃れた志士である。

この人は東京から二十里ばかり東北、有名な霞浦に臨んだ土浦の町續き、眞鍋町の善應寺といふ寺に居た、もとは良哉といふ坊さんであつた。

良哉は文化八年に土浦から北へ五里、筑波山の東に當る柿岡町の在、浦須村の農家に生れた。九つの時から隣の下林村觀音寺の住持康哉の弟子になつて、良哉といふ名をもらつた。老僧康哉は常に心を皇室に傾けて居た人で、又萬葉集の歌が好きなどころから、釋契沖の人となりをも慕つて居た。世間では康哉を萬葉法師と呼んだ。小僧の良哉も、見やう見まねで、十四の年に

釋契沖
大阪の國學者
萬葉集を研究して代匠記を著した
元祿十四年
(三三)歳
年六十二

いくつねて春はくるやと父母に、

問ひし昔もありにしものを。

などと詠んだ。長ずるまゝに萬葉が好きになり、師匠が死んでからも始終歌を詠んだり、又古い歌や歴史をしらべたりして居る。一體日本の國柄は、調べれば調べるほど外國と違つて居る點が著しくなつて來る。良哉も古い歌をしらべ、古い歴史をしらべて、深く悟る所があつた。日本の國が有りがたく、貴いはいはれ、又皇室の貴い事、有りが

たい事を深く知つた。それでどうかして幕府を倒し、天皇の大御心をお安め申上げようと思ひ立つた。自分も何とかして京都へ上りたい。京都には天皇が入らせられる、早く京都へ上りたいと、明けくれ思つてゐた。この頃は徳川幕府の末で、世の中が追々に亂れて來た時であつた。

土屋侯
土浦藩主
土屋直

二十五の年に善應寺の住職に轉じた。その翌年は凶作であつたので、良哉は自分の貯はもとより、長持に二棹あつた藏書を皆賣拂つて困窮の人に施した。で、土屋侯から厚く賞せられた事もあつた。寺の後の小高い丘は、富士と筑波を左右に眺め、霞浦はすぐ脚下に見下す風景のよい處であつた。それゆゑ土屋侯を始め、當時の名士がよく遊びに來られた。中には國事について祕密に相談をするものもあつた。水戸の藤田東湖などもその一人であつた。しかし良哉は農事の忙しい時には戸を立て切つて、誰が風景を見に來ても上げなかつた。

そして「あんなに農民が汗水を流して働いてくれるのを高みで見物するには忍びない、強つて見たければその處へいつて見るがい。」といった。良哉は多くの學者や名士と親しくなるにつけて、追々自分といふものを見つめる様になつた。そして、何だか自分の境遇に不安が起つた。今日の時世は、こんな事をして居られる時ではないと、つくづく考へる様になつた。

ある日
天保十四年
良哉が三十
九の時

ある日の事、良哉は村中へふれた。「明日はお寺で不思議な事があるから、見に来るがい。」これを聞いた村の人は皆、何かがあるのか知らんと、その日の朝早くから、誘ひ合つて、寺へ來た。來て見ると驚いた、寺の庭のまん中で、住職は寺男に薪を山のやうに積ませてそれをもやしてゐる。その四方には竹をたて、注連繩が張つてある。よく見ると、何も煮るのでなし、湯を沸かすでもないらしい。村人は何事だらうと不

カキヤ

鹿島神社
鹿島神社
鹿島神社

鹿島神社
鹿島神社
鹿島神社

色川三中

通稱三郎兵衛

國學者

土浦の人

安政二年

(三五)歿

年五十四

鹿島神社

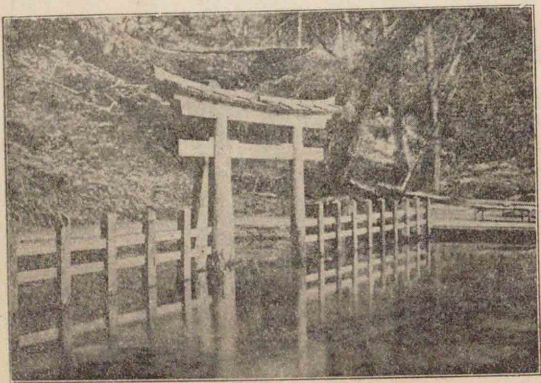
常陸國鹿島

郡宮中村に

ある

今官幣大社

思議に思つて見て居た。やがて住職は「皆さん御苦勞でござつた。私は今日から坊主をやめて、御國の爲に盡さうと思ふのぢや。」といつて、お經を一遍讀むや否や自分の着てゐた袈裟衣を脱ぎすて、いきなり炎々と燃え上つてゐる焔の中へ投入された。村人はあれよ／＼と驚いてゐる間に、袈裟も衣もめろ／＼と燃えてしまふ。良哉は、そのまま、裸體で寺から駈下りて町へ出た。そして、一目散に土浦の色川三中の家へいつて新しい衣服をもらつて着用し、汚れた身を清めるといふので、霞浦を船で渡つて、鹿島神社に詣つた。



鹿島神社御洗手池

鹿島の社には有名な御手洗の池といふ清い泉がある。其處に七日の間水垢離をして、身をも心をも洗ひ清め、やつと安心して、拜殿のはるか

下の方に荒蕪を敷いて、神前に祝詞をあげた。そして神徳を謝するた
めに同社の境内に櫻を千本植ゑた。今でも東雄櫻といつて残つて居
る。さて自分はもう僧侶ではないのだから、色々考へた末、かねぐ好
きな櫻を苗字にして、名は東雄ときめた。

東雄は平素大君のおはします京の地を慕ひ、たとひ飴賣になつても京
に住へれば本望だ。と口ぐせの様にいつて居たが、弘化二年年月あこが
れてゐた京都へ上ることになつた。その時の歌に、

一歩み歩めば歩むたびごとに
都へ近くなるが嬉しさ。

さて京都に着いて、
現神わが大君のおはします

都の土はふむもかしこし。

又將軍の居城たる江戸城の立派さに引きくらべて、京都の御所の粗末

なのを憤慨して、

今に見よ、高天の原に千木高知り

瑞のみあらかつかへまつらん。

それから数年の間、色々國事に就いて力を盡した。その國を思ふ心
がなみくでない上に、古歌や歴史に詳しく、歌も上手に詠むので、佐久
良東雄の名は、志士の間には誰知らぬものもなかつた。

處が突然東雄は幕吏に捕へられて、牢に入れられる事になつた。時は
萬延元年春三月、桃の節供の三日の日、珍しく大雪がふつた時、江戸城は
櫻田門外で、井伊大老が水戸の浪士に刺し殺された。當時東雄は大阪
に居て直接の關係はなかつたが、その浪士を一人匿まつてやつたとい
ふので、罪になり、遂に大阪で召捕られて江戸へ送られた。

唐丸籠といふ窮屈な駕籠に押込められて、東海道五十三次を下つて來
た。すると志士ぢや、歌人ぢや、佐久良東雄が通るぞといふので、途々の

井伊大老
名は直弼
彦根藩主
唐丸籠
平民で重罪
を犯したも
のを護送す
るときに用
ひる駕籠
唐丸はシヤ
モの一種大
きくて喧嘩
に強いこれ
を飼ふ籠に
似て居る故
の名

宿屋などでは、駕籠の傍へ短冊などをもつて来ては何か一筆とたのむ。東雄は、よし／＼といつては、歌をかいてやつた。それらの歌の中に、「花の散るを見て」といふ題で、

事しあらば、わが大君の大御爲

人もかくこそ散らまほしけれ。

またこんなのもあつた。

まつろはぬ奴こと／＼東の間に

やきほろぼさん天の火もがも。

おきふしも寐ても覺めても思ひなば、

立てし心のとほらざらめや。

現身の人なる吾や、鳥けもの

草木と共に朽ちはつべしや。

君がため命死ぬべき大丈夫と

まつろはぬ
江戸城炎上
の事をきい
て詠んだ歌

なりてぞ生けるしるしありける。

又今様歌もある。

このおほいなる天地の 中にちひさく生れいで、

千年に残る名もなくて、 消えゆく人こそはかなけれ。

さて江戸で傳馬町の牢屋に籠められたが、東雄は幕府から悪まれて居るので、毒害されるかも知れない、死ぬのは固より覺悟して居るが、そんな死に様をするのは残念だと思つた。それで食物のかはりに枇杷をくれと牢番に頼んで、毎日々々枇杷の實だけ食べて居た。かの伯夷、叔齊が首陽山の薇を食べたやうに、幕府のものはたべぬといふ心意氣もあつたのである。そのうちに到頭食を絶つて死んでしまつた。年は五十であつた。

其の後十年と立たないうちに、東雄はじめ勸王諸士の心血を注いだ結果として王政復古の大業は成就されて、めでたき明治の大御代となつ

伯夷・叔齊
支那の古
上の高士
周の武王が
殷の紂王を
伐つて天下
を取つたの
て周の粟を
食むのはい
さぎよくな
いといつて
首陽山に隱
棲して薇を
採つて食つ
て居た

水戸侯
徳川慶篤

現代文新鈔 卷一

た。その明治元年の十二月に水戸侯が金を東雄の遺族に贈つて千住の小塚原から大阪の夕陽が丘に改葬させられた。明治二十四年には靖國神社に合祀せられ、三十一年には、忝くも從四位を贈られた。聖恩枯骨に及ぶといふべきである。

朝日かげ豊さかのぼる日の本の

やまとの國の春のあけぼの。

といふ東雄の歌は、大日本帝國の今日あることを早くも豫言したやうに思はれる。

佐久良東雄は櫻咲く日本の國の男子の中の男子である。

(和歌百話に據る)

現代文新鈔 卷一終

現代文新鈔 卷一

大大大大大
正正正正正
十十十十十
五五四二一一
年年年年年
五五十一十
二一一二二
月月月月月
廿廿三十廿
五二十八八五
日日日日日
修修訂修訂
正正正正正
五五四三再
版版版版版
發印發發發
行刷行行行刷

卷一	定價	六十五
卷二	定價	六十五
卷三	定價	六十五
卷四	定價	六十五
金三拾九錢	臨時定價	六十五
金三拾八錢	臨時定價	六十五
金三拾七錢	臨時定價	六十五
金六拾九錢	臨時定價	六十五
金六拾八錢	臨時定價	六十五
金六拾七錢	臨時定價	六十五

東京市小石川區高田老松町五十二番地

編者 吉田彌平

東京市神田區通神保町六番地

印刷者 上原才一郎

東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
(振替) 口座東京三二七番



大正十五年六月七日
文部省檢定

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直に御送附可致候



広島大学図書

2000302233

